

第28図 西側周溝遺物出土状況微細図



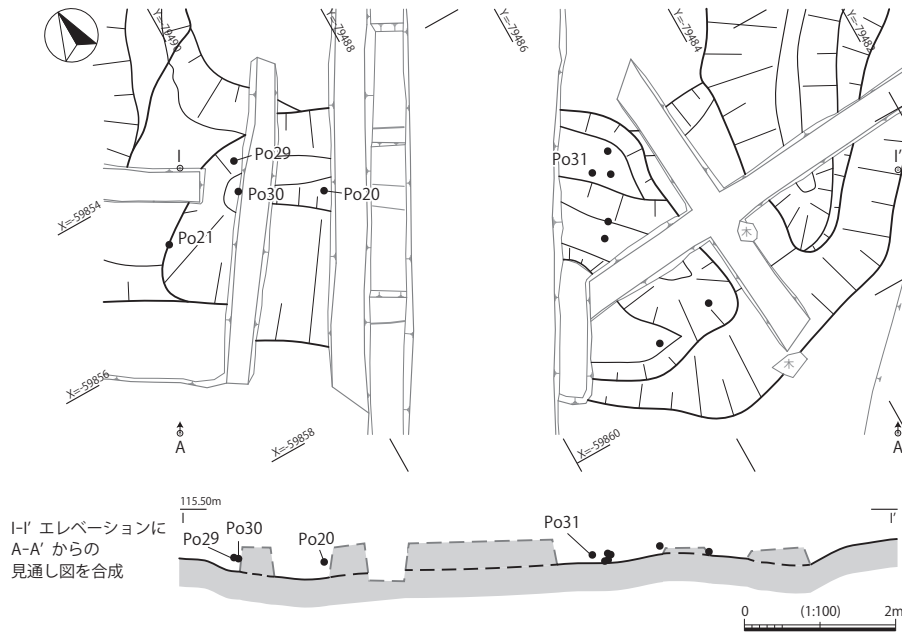
第 29 図 東側周溝遺物分布図

していたため掘削面積がほかの周溝と比較して狭いが、北側トレンチ内から壺頸部（第 47 図 Po17）や底部の破片（第 47 図 Po18、19）が出土し、周溝の東西端部では、西側周溝や墳頂部出土のものと同一体と考えられる壺胴部の破片（第 47 図 Po22）が出土している。特に Po17 については、頸部外器面をタテハケで調整した後に貝殻による多重沈線文を巡らす特徴的なつくりをしている。

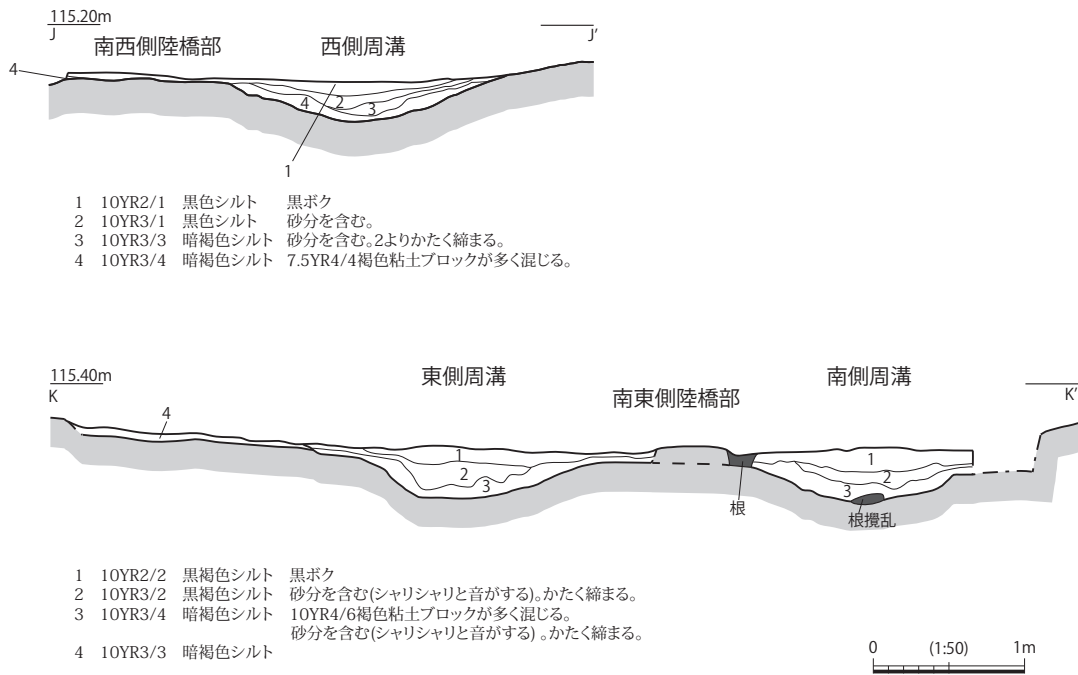
②西側周溝（第 24、25、27、28 図）

第 28 次調査 Tr. 7 及び 10 で検出された 6 溝、9 溝の一部である。Tr. 7 では周溝底まで調査された。トレンチに充填されていた土嚢を除去して層序を再確認した後、第 33 次調査では D ラインより南側、第 34 次調査では北側の調査を行った。

周溝の長さは 9.54 m 以上、残存幅は最大 2.76 m、墳丘墓外からの深さは 0.14 m、墳丘盛土残存最高点から底面までの高低差は最大 1.20 m である。遺物は、埋土①層下面から埋土②層にかけて、大量の土器片が出土した（第 27・28 図）。遺物の記録と取り上げは、4 段階に分けて行った。周溝底面付近の土器は土圧による劣化が激しく、出土した形状のまま保存できなかった破片がある。同一体とみられる土器片の分布をみると、多くが周溝北半分全体に広がる。中には墳丘上の土器片と特徴が一致するものがあり、墳丘上に据えられた土器が転落した可能性が考えられる。また、周溝中央の底面付近では、甕口縁部の完形品が口縁側を周溝底に向けた状態で出土した（第 46 図 Po 8）。胴部の破片は一切出土せず、頸部の割れ口が一定の高さを保っていることから、頸部以下を割り、器台として転用したものと考えられる。特徴的な遺物としては、北側周溝で出土した Po17 同様、タテハケ後に頸部に多重に沈線を巡らせる壺がある（第 46 図 Po 1、2）。口縁部の形態はいずれも在地の土器と同じものであり、弥生時代終末期前半の特徴を示すが、頸部が八字状に開く形状と、製作・施文方法は在地の土器には見られない特徴であり、これまで妻木晩田遺跡ではほとんど出土していない。器種としては壺・甕が多く、器台の可能性のあるものは 1 点程度しかないことから、甕転用器台と合わせて、墳墓上の葬送儀礼に用いられた土器と考えられる。



第30図 南側周溝遺物分布図



第31図 南西部及び南東部陸橋部断面図

③東側周溝 (第24、25、29図)

民有地であるため第28次調査の対象から外れており、第33次調査ではDラインから南側、第34次調査では北側を調査した。周溝の長さは10.09 m、幅は最大2.95 m、墳丘墓外からの深さは0.46 m、墳丘盛土残存最高点から底面までの高低差は最大で1.03 mである。周溝埋土①及び②から弥生時代後期の土器片が出土しているが、西側周溝のように、終末期に比定されるものはみられなかった(第29、48図)。第33次調査では、埋土②から有茎柳葉式の鉄鏃が1点出土した(写真PL 9-3、32-1、第49図)。墳丘側の位置で出土しているため(第29図)、墳頂部からの流れ込みの可能性があるが、今回検出した埋葬施設には伴わないものと考えられ、用途・性格は不明である。

④南側周溝（第24・25・30図）

第28次調査Tr. 9及び10で検出された8溝と9溝の一部である。周溝の長さは7.58 m、幅は最大3.75 m、墳丘墓外からの深さは0.60 m、墳丘盛土残存最高点から底面までの高低差は最大で0.87 mである。周溝埋土①及び②から土器片が出土しているものの、全周溝の中では一番点数が少ない。3号墓に伴う時期とみられるPo20・21が出土しているが、それ以外では墳丘墓の時期に対応するものはみられなかった。

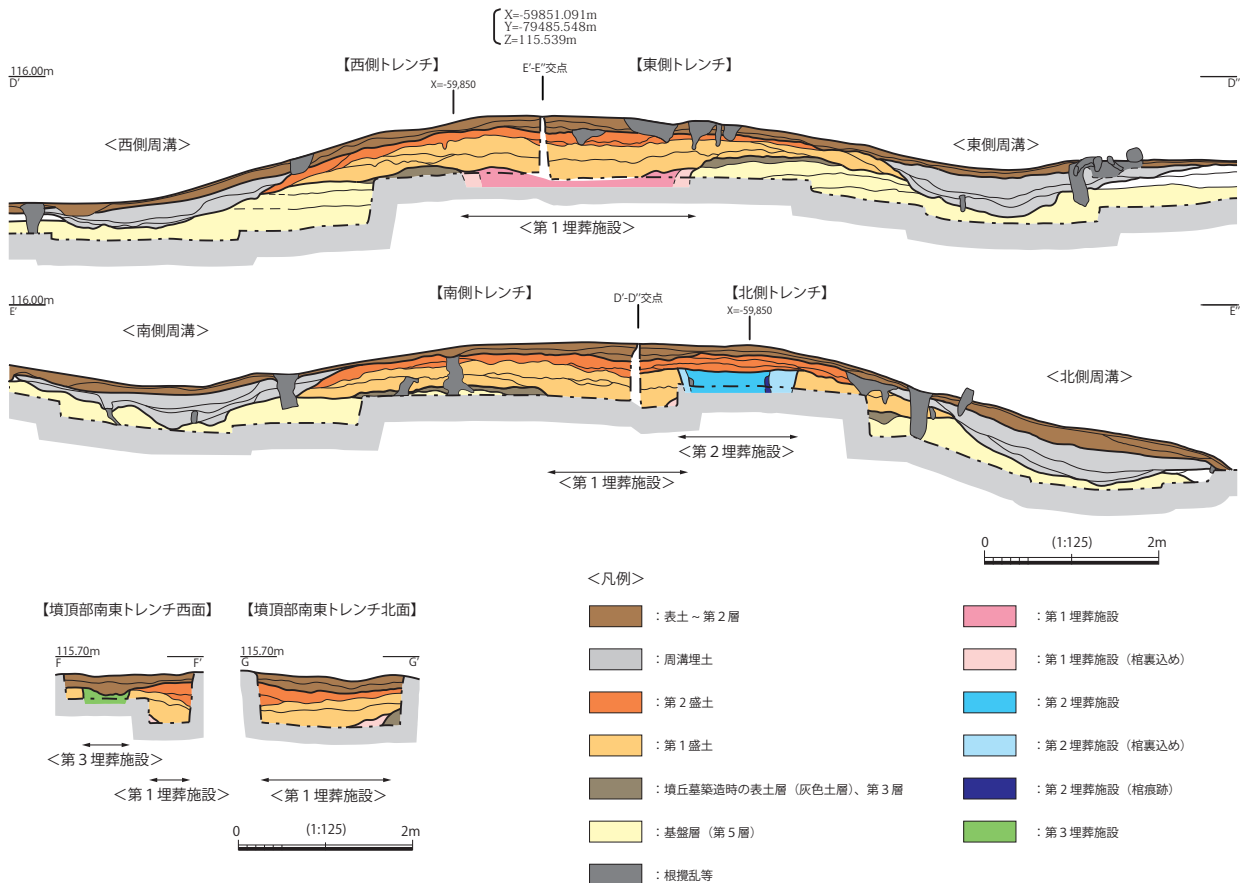
(3) 陸橋部

松尾頭1号墓・2号墓と同じく、墳丘墓の四隅において溝が途切れ、墳丘側と溝の外側が陸橋状につながる状況を確認した（以下、陸橋部と呼称）。第33次調査で南東側と南西側、第34次調査で北東側と北西側を検出した。南東側と南西側の陸橋の規模はほぼ同じであり、陸橋の長さ約3 m、上幅約1 m、下幅約2 m、周溝底からの高さ約0.3 mである。北西側は端部が崩落によって失われているものの、長さ1.8 m以上、上幅約1.2 m、下幅約3.3 m、周溝底からの高さ約0.4 mである。北東側は最も高く造られており、長さ約4 m、上幅約1.3 m、下幅約3 m、周溝底からの高さ約0.7 mである。陸橋部は一部に墳丘盛土がのるものの、盛土成形ではなく、基盤層の削り出しによって造り出されている。

(4) 墳丘盛土及び墳丘構造

周溝完掘後、墳丘内の調査を行うため、D・Eラインに沿って十字状にトレンチを設定した（第24・25図）。墳丘の層序は上から、表土、第2層、追葬に伴う盛土（2次盛土）、初葬に伴う盛土（1次盛土）、墳丘構築時の表土層と考えられる灰色土層（第3層相当）、大山火山灰に由来するローム層（第5層）となっている。丘陵全体は、マウンド状地形Eのある南側が最高所となっており、北側に向かってなだらかに下がっている（第21図）。3号墓下の基盤層も南東側が高く北西側に向かって下がっており、本来の自然地形を反映していると考えられる。その直上に堆積する灰色土層は厚みが10cm程度あり、全トレンチで確認できた。灰色土層中には炭化粒が多量に混入し、基盤層や盛土に比べてくすんだ色をしている。この灰色土層の上面レベルは、各トレンチの高いところで、東側が標高115.09 m、南側が標高115.07 m、西側が標高114.98 m、北側が標高114.79mを測り、東西で11cm、南北で28cmの高低差があるが、下位の基盤層と高低差はほぼ同じであり、墳丘構築時の表土層にはほとんど手が加えられていないと考えられる。ただし、いずれの断面でも周溝の手前1 m前後はこの層が残っていなかったため、周溝に面した墳丘（斜面部）成形の一環として盛土と基盤層の接着強度を高めることを目的に取り除かれていると考えられる。

埋葬施設は墳丘内に少なくとも3基あり、墳丘墓の築造契機（初葬）は墳丘中央の木棺1基（第1埋葬施設）、追葬として木棺1基（第2埋葬施設）、土壙1基（第3埋葬施設）を確認している。第1埋葬施設の墓壙は、灰色土層から掘り込まれており、棺を裏込め土によって固定した後に、周溝の掘削で生じた基盤層土で盛土を行っている。初葬に伴う盛土の手順は、まず①周溝側の灰色土層を除去して墳丘の範囲を確定した上で、②周溝を掘削した基盤層土を灰色土層上に盛り（Dライン12・13層、Eライン22・23層）③棺を土で覆い（Dライン11層、Eライン21層）、④最後に墳丘全体を覆う（Dライン8～10層、Eライン19層）というものである。墳丘端部は微調整のため細かく盛土されている（Dライン7・8層）。盛土上面の高さは115.3 m前後であり、平坦に整えられている。この1次盛土の厚さは、30cm程度である。最初の埋葬行為が終了した後、第1埋葬施設の北側で第2埋葬が



第32図 墳丘分層概念図

行われた。第2埋葬施設は第1埋葬後の盛土上面から掘り込まれており、埋葬終了後は、1～3層、合わせて15cm程度の盛土によって墳丘全体が覆われた。第3埋葬施設も第1埋葬の盛土上面から掘り込まれていることから、第2埋葬施設と第3埋葬施設は第1埋葬終了後ほぼ同時期に設置されたものと考えられるが、先後関係は不明である。なお、盛土にも土器片が含まれていたが、小破片ばかりであり、各埋葬直後あるいは盛土前の土器供献は認められなかった。

(5) 墳丘規模及び軸

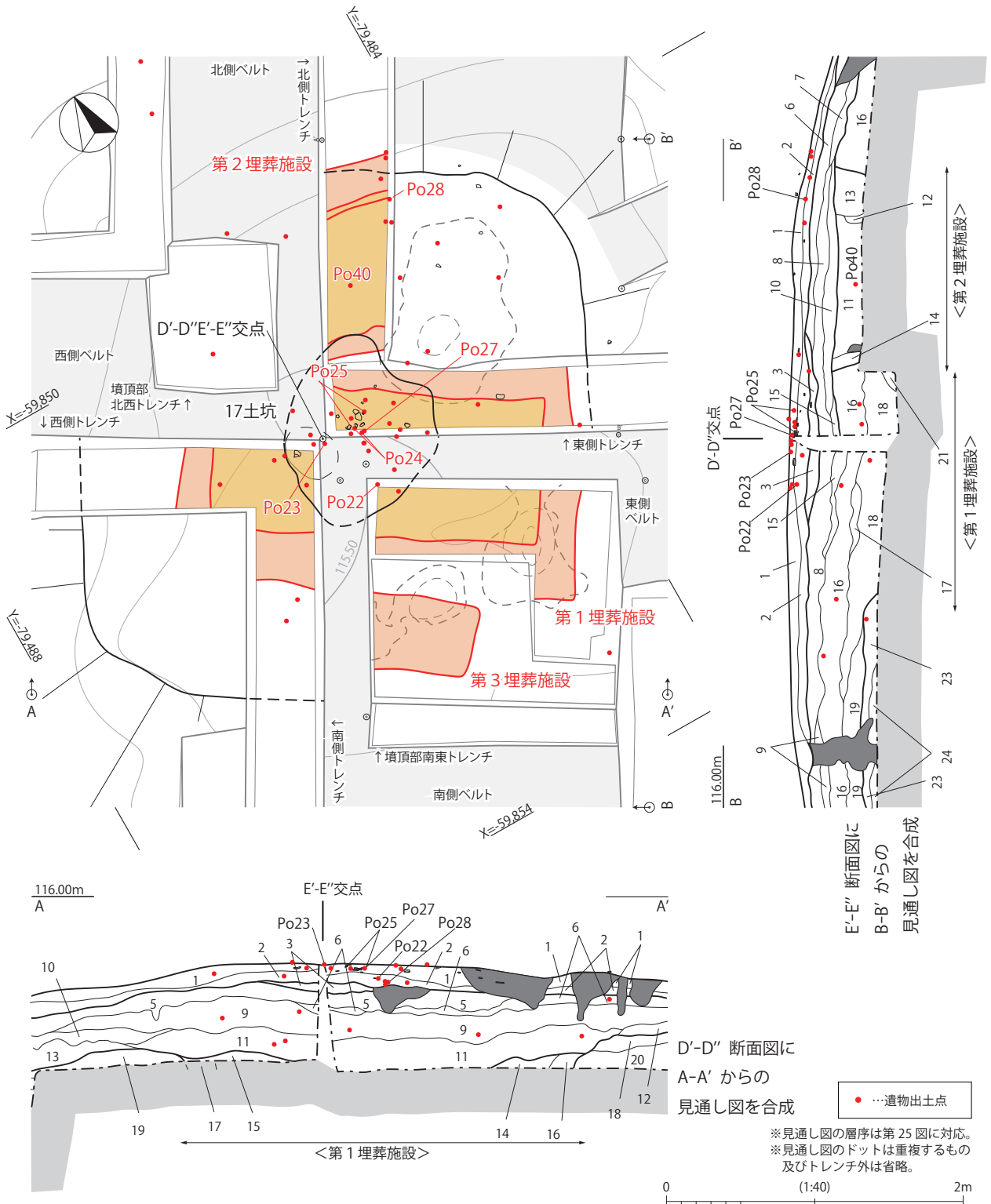
周溝の中心軸で墳丘規模を計測すると、南北（長軸）10.41 m、東西（短軸）9.78 mを測る。墳頂部の残存高は標高115.43 m、盛土の厚さは最大で0.42 mである。また、墳丘の長軸は、N - 31° - E となり、立地する丘陵の軸とほぼ平行するように設定されている。

2. 埋葬施設の調査

(1) 調査の手順及び目的

埋葬施設の確認は、墳頂部におけるトレンチ調査のみとし、墓壙の位置や規模が判明したところで調査を終了しており、棺内部の構造や副葬品は確認していない。第28・33次調査では、墳頂部中央において17土坑（第28次調査時の呼称）を検出しており、埋葬施設検出の手掛かりになることが想定された。17土坑の上面を中心に弥生時代終末期前半の土器片が出土しているが、いずれも小片である。17土坑の規模は、南北1.3 m、東西0.9 m、深さ7cmで薄い皿状の形状をしており、位置も第1埋葬施設の直上にあることから、木棺の腐朽に伴う陥没によって生じた窪みに土器の破片が残ったものと判断した。墳丘のトレンチ調査では17土坑周辺以外での土器片は少なく、墓壙直上での破

碎土器供献等は確認できなかった。墳頂部と西側周溝とで同一個体と考えられる破片が出土しており、墳丘上にあった土器が破片となって周溝に転落したと考えられる。平面検出では埋葬施設を確認できなかったため、東・西・南・北の周溝確認トレンチを延長し、墳丘中央まで断ち割って確認した。その結果、墳頂部北側トレンチにおいて埋葬施設を確認した。この埋葬施設は、墳丘の北側に寄っており、第2盛土の下面から掘り込まれていたため、この墳丘墓の主体となる埋葬施設は別にあると判断し、北側トレンチは埋葬施設底面まで掘削せずに南・東・西トレンチの掘削を進めた。そして、盛土



第33図 墳頂部埋葬施設検出状況及び遺物分布図

の下に灰色土層と基盤層、墳丘墓築造の契機となる埋葬施設の落ち込みを確認した。これを第1埋葬施設とし、先に北側で検出していた埋葬施設を副次的な埋葬と考え第2埋葬施設とした。ただ、第1埋葬施設の北側縁が第2埋葬施設の下にあり墓壙の形状や規模が把握できないこと、また墳頂部の埋葬施設数を把握しきれていないことから、それらの課題を解決するために墳頂部南東側（以下、墳頂部南東トレンチ）を掘り下げることにした。盛土を第2埋葬施設上面と同程度の高さまで掘り下げた段階で、墳頂部南東トレンチの南側において埋葬施設とみられる遺構を検出し、断面でも立ち上がり確認できたため、第3埋葬施設とした。第3埋葬施設を残しつつ第1埋葬施設の確認をするため、墳頂部南東トレンチの北東側をL字に掘削して基盤層まで掘り下げた結果、第1埋葬施設の墓壙掘方を確認して規模を特定することができた。

## (2) 埋葬施設の配置と基数

埋葬施設は、少なくとも3基あることを確認し、いずれも墳丘内に位置する（第24・33図）。第1埋葬施設は、墳丘中央のわずかに北寄りに位置する。第2埋葬施設は墳丘北側に位置し、平面的には第1埋葬施設の墓壙北辺と第2埋葬施設の墓壙南辺が重複する。第3埋葬施設は墳丘中央のやや南寄りに位置し、平面的には第1埋葬施設の墓壙南辺と第3埋葬施設の北辺が重複する。

## (3) 各埋葬施設の詳細

### ①第1埋葬施設

第1埋葬施設は、3号墓築造の契機となった埋葬であり、松尾頭3号墓のほぼ中央に位置する。第1埋葬施設の範囲は、東・西・南トレンチ及び墳頂部南東トレンチにおいて検出した。墳丘墓築造時の表土層である灰色土層の上面から掘り込まれている。墓壙の規模は、灰色土層上面で長軸（東西）2.97 m、短軸（南北）1.62 m以上で隅丸長方形を呈す。東西頭位であり、墓壙の軸は、S - 57° - Eである。断面では墓壙の掘り込みとともに、木棺の腐朽に伴う盛土の落ち込みも確認できた（Dライン11層、Eライン21層、墳頂部南東トレンチ8層）。棺は木棺と考えられ、木棺痕跡は確認できなかったが、木棺を固定したと考えられる裏込めの締まった土と木棺内への落ち込み土を検出することができた。裏込めの厚さは、東側で25cm、西側で22cm、南側36cmとなっており、木棺の推定規模は、長軸（東西）2.20 m、短軸（南北）1.00 mである。1つの墓壙に1つの棺が納められたと考える。

### ②第2埋葬施設

第2埋葬施設は、3号墓の調査において最初に発見した埋葬施設であるが、副次的な埋葬施設であり、今回は第1埋葬施設の調査を優先したため、墓壙規模や形状など得られた情報は少ない。第2埋葬は、1次盛土後、第1埋葬施設よりも北側で行われた。墓壙の規模は、短軸（南北）1.37 mで、長軸（東西）の規模は不明である。主軸は、S - 73° - Eをとり、第1埋葬施設よりも北側に振れる。しかし、墓壙の端が第1埋葬施設の墓壙と重複することを考えると、第1埋葬を意識して墓壙の位置を決定している。墓壙内には木棺が据えられたとみられ、棺裏込めの土との締め具合の違いから、棺は短軸（南北）0.93 mと考えられる。第1埋葬施設や第3埋葬施設よりも掘削深度は深い、棺底部まで達していないことから、棺構造や副葬品は確認できなかった。

### ③第3埋葬施設

第3埋葬施設は、第1埋葬施設の南側に位置し、第2埋葬施設と同じく、1次盛土上面から掘り込まれている。検出面での規模は、長軸（東西）0.73 m以上、短軸（南北）0.55 mで隅丸長方形の形状をしており、軸はS - 50° - Eと第1埋葬施設に比べてわずかに南側に振れる。墓壙の位置は、第

1 埋葬施設の墓壙と重複する位置にあり、軸もほぼ同じことから、第2埋葬と同様、第1埋葬を意識して埋葬行為が行われたと考えられる。第3埋葬施設についても墓壙を検出できた任意の高さで掘削を止めたため、棺の有無や墓壙下部の構造、副葬品については確認していない。なお、掘削範囲では遺物は出土していない。墓壙の東側は検出できたが、西側は幅30cmの畔の中に納まっているものとみられ、墓壙の規模が1.0 m未満ということから被葬者は小児と考えられる。

## 第4節 松尾頭4号墓・5号墓の調査

松尾頭4号墓・5号墓（以降、4号墓、5号墓）は、妻木晩田遺跡で38・39番目に確認した弥生時代の方形周溝墓である。松尾頭墳丘墓群の中では西端に位置し、3号墓からは西に約20 m離れるが、4号墓と5号墓の間隔は約1 mで近接して存在する。周溝は隅が途切れて陸橋状になる構造をしており、松尾頭1～3号墓と同じ形態をとる（第34図）。盛土の上部は後世に削平されており、残存する墳丘の最頂部の標高は4号墓で116.10 m、5号墓で116.20 mである。築造時期は、5号墓の周溝から出土した土器の年代観から3号墓と同じ弥生時代終末期前半と考えている。埋葬施設は盛土下に存在すると考えられたが、同時期に比定される3号墓で墳丘墓築造過程を明らかにするための断ち割り調査を行って成果が得られたこともあり、4・5号墓については遺構の保護を優先して断ち割り確認は行っていない。

### （1）トレンチの設定と遺構名

4・5号墓は、松尾頭10区の丘陵の中でほぼ中央に位置する。第28次調査で墳丘墓の可能性のあるものとしてマウンド状地形C・Dと仮称し、トレンチによる内容確認調査が実施された（Tr.11～16）。その結果、マウンドの周囲に溝状遺構を確認した（10～16溝）ため、第34次調査では、第28次調査のTr.13・14を開けて溝の位置を確認したうえで既存トレンチに囲まれた範囲をトレンチ2（T2）として設定し、掘削を行った。

今回の調査で検出した周溝は、4号墓の東側周溝（第28次調査12溝）、南側周溝（同13溝）、5号墓の西側周溝（同15溝）、北側周溝（新検出）である。第28次調査時のそのほかの溝についても、おおむね周溝位置を反映しているものと考えられる。

トレンチ全体の掘削は、表土及び遺物包含層のみに留め、墳丘及び周溝を検出した段階で終了した。なお、周溝の切り合い関係を確認するために、4号墓の南側周溝及び5号墓の北側周溝に掛かる位置に土層観察畔とサブトレンチを設定して周溝部分は基盤層まで確認している。

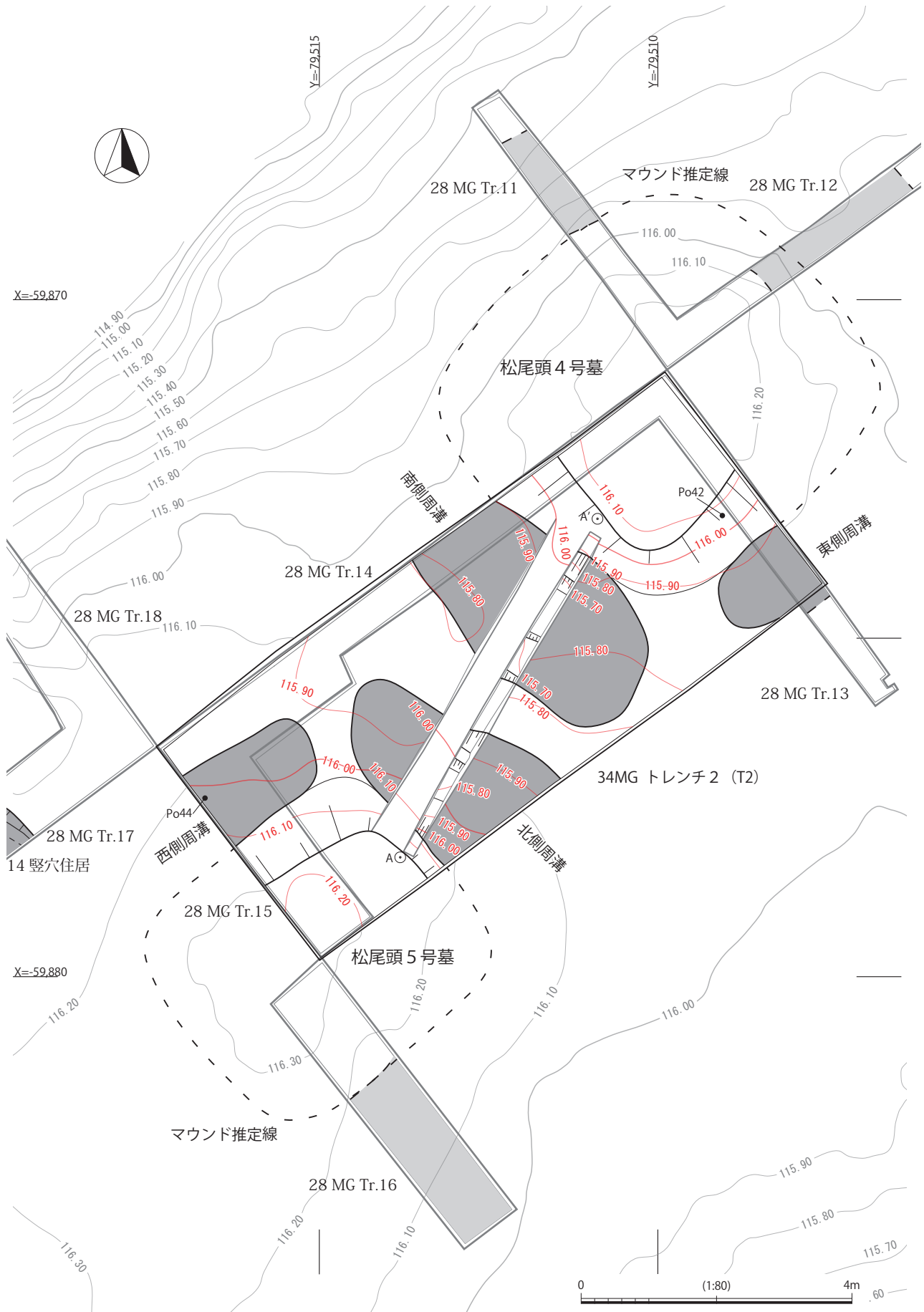
### （2）調査の成果

調査の結果、4・5号墓は方形の墳丘を持つ方形周溝墓であることが確認できた。土層確認用ベルトとサブトレンチを設定して掘削を行ったところ、土層断面の観察所見から両者の前後関係は明確にできなかった。5号墓の北側周溝から弥生時代終末期前半の遺物が出土したこと、松尾頭3号墓と同じく周溝の隅が途切れて陸橋状になるなど構造が似ていることから、2基の墳丘墓は3号墓とほぼ同時期の方形周溝墓であると判断した。

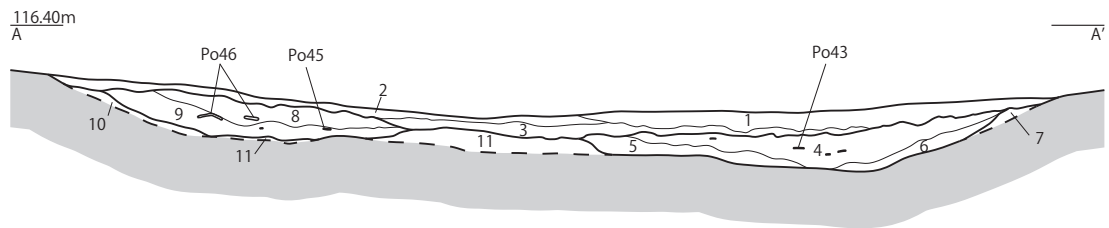
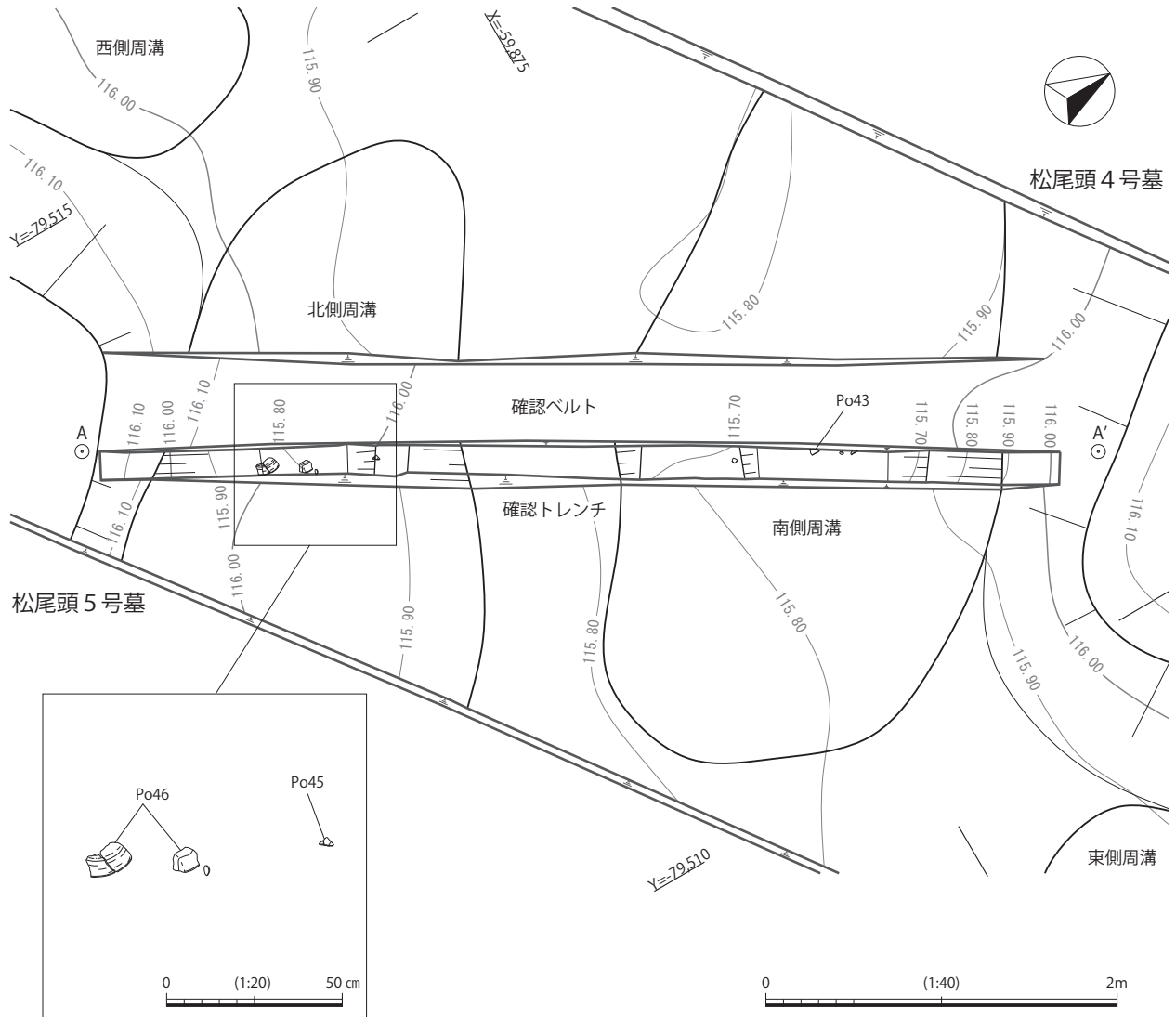
#### ① 4号墓

4号墓は、今回検出した南側周溝、東側周溝の範囲と第28次調査時のTr.11・12の位置から、墳丘規模は長軸（南北）7.3 m、短軸（東西）7 mと推定でき、南側周溝底からの残存高は0.43 mである。



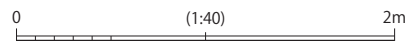


第34図 トレンチ2遺構全体図 (松尾頭4号墓・5号墓)



- |    |          |     |        |                                       |
|----|----------|-----|--------|---------------------------------------|
| 1  | 10YR4/6  | 褐色  | 粘質極細粒砂 | 極粗粒砂・礫含む。                             |
| 2  | 10YR3/4  | 暗褐色 | 粘質極細粒砂 | 極粗粒砂・礫含む。                             |
| 3  | 10YR2/3  | 黒褐色 | 粘質シルト  | 10YR4/4褐色シルトブロック40%含む。                |
| 4  | 10YR2/1  | 黒色  | 粘質シルト  | 10YR4/4褐色シルトブロック5%含む。土器片含む。しまりなし。     |
| 5  | 10YR3/3  | 暗褐色 | 粘質シルト  | 10YR4/4褐色シルトブロック15%含む。                |
| 6  | 10YR3/4  | 暗褐色 | 粘質シルト  |                                       |
| 7  | 7.5YR4/4 | 褐色  | 粘質シルト  | 7.5YR5/6明褐色シルトブロック10%含む。φ 10mm以下炭粒含む。 |
| 8  | 10YR2/3  | 黒褐色 | 粘質シルト  | しまりなし。                                |
| 9  | 10YR2/2  | 黒褐色 | 粘質シルト  | 土器片含む。しまりなし。                          |
| 10 | 7.5YR4/3 | 褐色  | 粘質シルト  | 7.5YR4/6褐色シルトブロック30%含む。φ 10mm以下炭粒含む。  |
| 11 | 10YR4/6  | 褐色  | 粘質シルト  | φ 1~2mm炭粒含む。φ 1~2mm白色砂含む。             |

- 表土
- 第1層(松尾頭4号墓墳丘削平二次堆積土)
- 松尾頭4号墓南側周溝埋土
- 松尾頭4号墓墳丘盛土
- 松尾頭5号墓北側周溝埋土
- 松尾頭5号墓墳丘盛土
- 第5層(基盤層)



第35図 松尾頭4号墓・5号墓周溝土層断面及び遺物出土状況図

墳丘は3号墓と同じく、周溝掘削土を盛り上げて成形していると考えられる。なお、確認ベルト断面に盛土が混じる層が堆積しており（第35図第3層）、墳丘は後世に削平を受けていると考えられる。

周溝は、東側周溝及び南側周溝を検出した。東側周溝は、幅1.34 m、長さ1.42 m以上、南側周溝は、幅2.17 m、長さ3.67 m以上、墳丘墓外からの深さは0.18 mである。陸橋は南東部を検出し、幅は最小で1.19 mである。サブトレンチや周溝検出面、墳丘直上から土器の破片が出土しているが、時期を特定できるものはない（第49図Po42・43）。また、残存する墳丘頂部で埋葬施設の検出を試みたが確認はできなかった。

## ②5号墓

5号墓は、今回検出した周溝の範囲と第28次調査時のTr.16の溝の位置から、墳丘規模が長軸（南北）6.6 m、短軸（東西）5.7 mと推定でき、周溝底からの残存高は0.48 mである。墳丘は3号墓と同じく、周溝掘削土を盛り上げて成形していると考えられる。周溝は北側周溝及び西側周溝を検出した。西側周溝は、幅1.27 m、長さ1.84 m以上、北側周溝は、幅2.09 m、長さ2.88 m以上、墳丘墓外からの深さは0.07 mである。陸橋部は北西部を検出し、幅は最小で0.58 mである。北側周溝からは弥生時代終末期前半の器台が出土した（第49図Po46）が、そのほかは弥生時代後期の土器である（第49図Po44・45）。また、残存する墳丘頂部で埋葬施設の検出を試みたが確認はできなかった。

## 第5節 その他の遺構の調査

### （1）弥生時代後期以前の遺構分布と遺構名称（第36図）

墳丘墓群築造以前の遺構の分布状況について確認するため、10区北東部のAベルトより東側では第3層を除去し、面的な調査を行った。なお、松尾頭1区の調査では、弥生時代中期後葉～後期後葉の竪穴住居等が確認されており、第28次調査の際には10区中央のTr.17において弥生時代後期中葉の竪穴住居跡（14竪穴住居）が1棟検出されている。

第33・34次調査において新たに遺構を検出したが、遺構の性格が明らかにできなかったものが多かったため、それぞれの調査回数に通し番号を付けて呼称した（例：3301遺構、3401遺構）。なお、3401遺構及び3402遺構については、第2層下面で検出しており、遺構の時期も弥生時代後期とは断定できていないため、第24表の遺構一覧表に掲載するのみとする。

### （2）松尾頭3号墓周辺の弥生時代後期遺構（第36図）

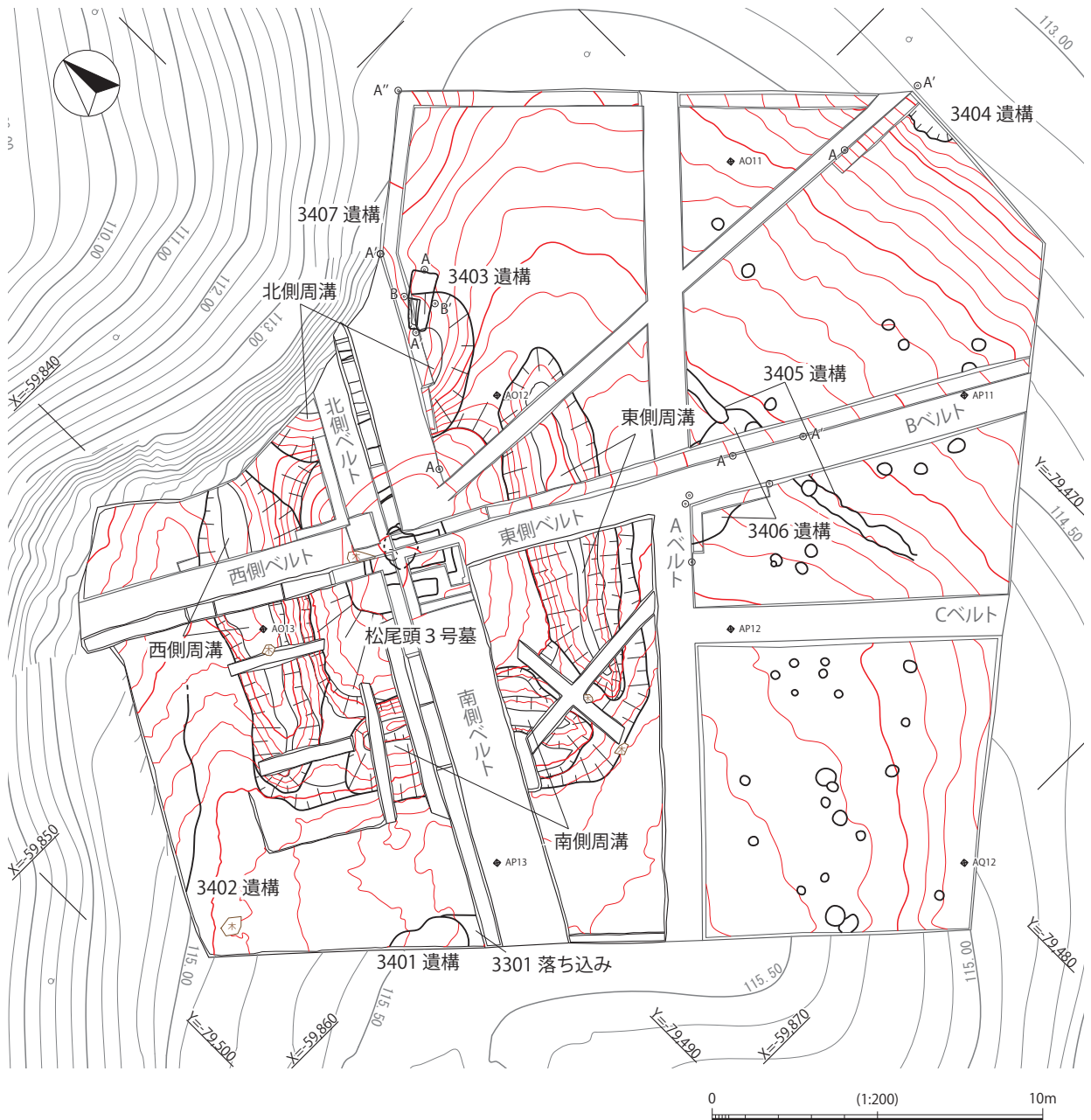
3号墓北側では、北側サブトレンチ付近において2基の遺構を確認した。北側周溝は、弥生時代後期以降の遺物を含む第3層の上面から掘り込まれている。第3層の下面で3403遺構と3407遺構を確認した。

#### ①3403遺構（第37図）

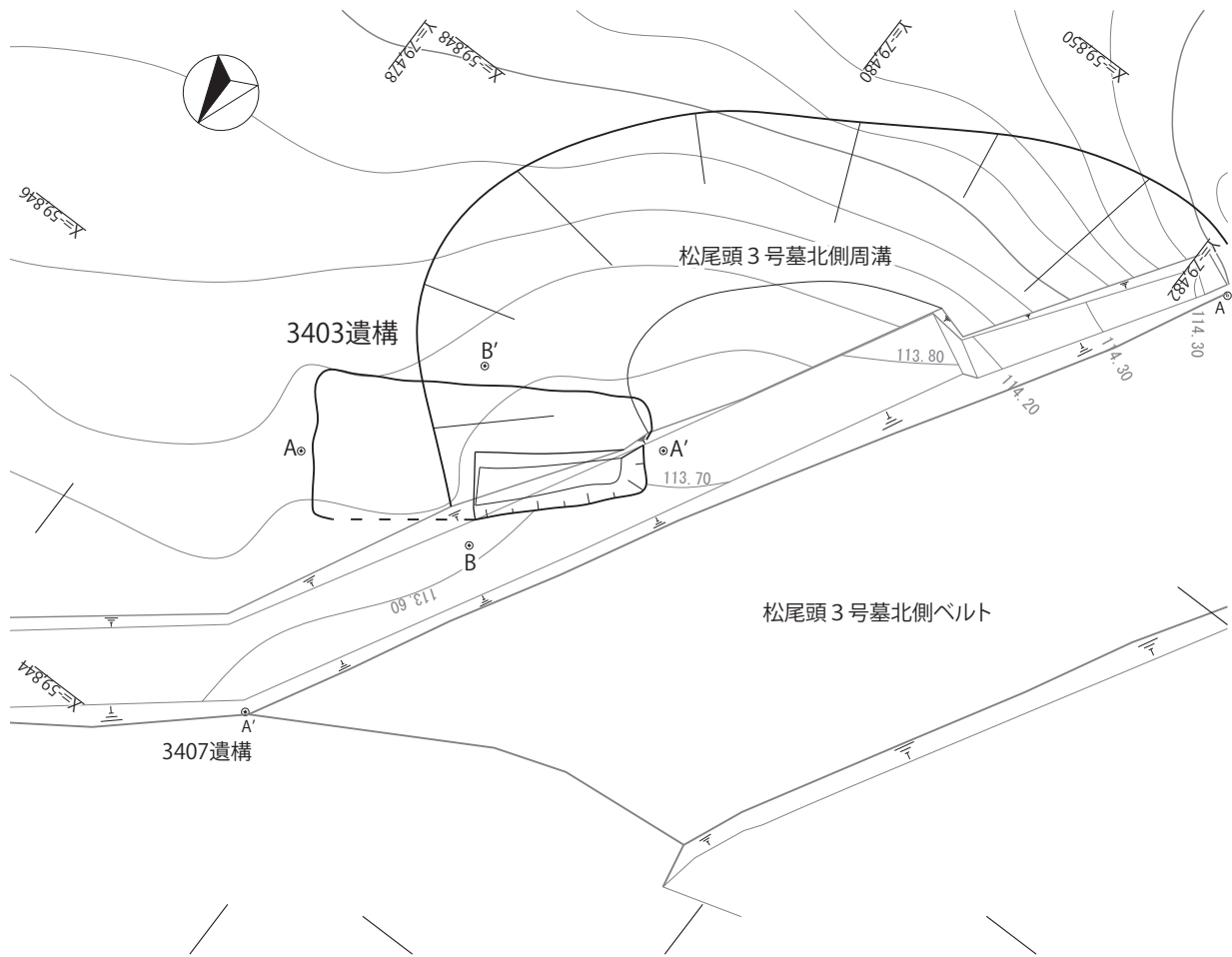
隅丸長方形の土坑である。遺構の南側は3号墓の北側周溝に切られており、後述する3407遺構を切ることがAラインのトレンチ調査によって判明した。遺構の規模は第3層を部分的に除去して確認し、長軸（南北）1.80 m、短軸（東西）0.78 mで深さは0.85 mである。遺構の性格を明らかにするために北側サブトレンチに係る四分割範囲を掘削した。埋葬施設の可能性も考えたが、土層堆積や遺構床面で木棺や小口の痕跡を確認できなかったことから遺構の用途は不明である。8・9層以外に土器（第51図Po49）や炭粒が混入しており、弥生時代後期前葉以降の遺構と考えられる。

② 3407 遺構 (第 38 図)

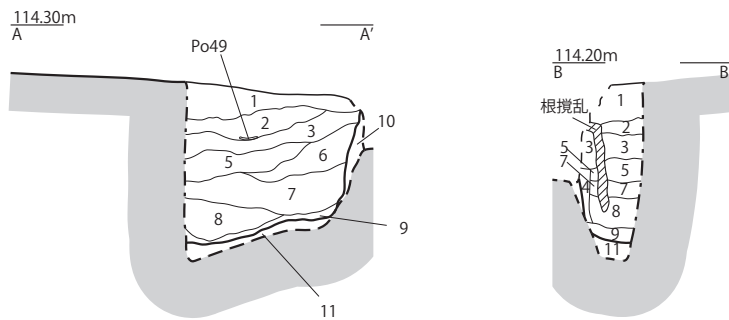
Aラインのトレンチ断面で確認した遺構であり、竪穴住居跡か丘陵斜面部を断面L字状にカットして利用された段状遺構もしくは竪穴住居跡の可能性が有る。遺構の南側は3号墓の北側周溝に切られており、東側は3403遺構に切られている。遺構の平面形は不明である。遺構の規模は、南北の立ち上がりの範囲で約4mである。なお、Aライン断面でのみ確認した⑤～⑦層についても、遺構の可能性が高いが、3407遺構に伴うものかどうか判断できなかった。遺構の埋土は4層に分けられるが、①層と②層は土色は異なるものの含有物や堆積状況、しまり具合が酷似しているため、②層の上部が土壌化作用により黒色化したものが①層と考える。①・②層と③層は角張ったブロックを多量に含み、土器片や炭化物が混入することから、人為的に埋め戻されたと判断した。ただし、①・②層はよく締まり空隙がほとんど無い点、③層はしまりが弱く空隙が多い点から、下層は大雑把に埋め戻され、上層は締め固めながら埋め戻されたことが推察できる。なお、④層はよくしまり、混入物が少ない粘土



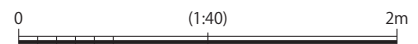
第 36 図 松尾頭 10 区北東部遺構全体図



3403遺構断面図



- |    |          |     |       |  |                      |
|----|----------|-----|-------|--|----------------------|
| 1  | 10YR4/6  | 褐色  | 粘質シルト | φ 1~5mm炭粒多量に含む。(層の上側2~4cm程度黒色化。10YR2/3黒褐色) | 3403遺構埋土<br>第5層(基盤層) |
| 2  | 7.5YR4/4 | 褐色  | 粘質シルト | φ 5~10mm炭粒多量に含む。土器片含む。                     |                      |
| 3  | 10YR4/6  | 褐色  | 粘質シルト | φ 5~10mm炭粒多量に含む。土器片含む。                     |                      |
| 4  | 7.5YR4/6 | 褐色  | 粘質シルト | 暗褐色ブロック40%程度含む。                            |                      |
| 5  | 7.5YR4/6 | 褐色  | 粘質シルト | φ 20mm程度炭粒含む。土器細片含む。                       |                      |
| 6  | 7.5YR4/6 | 褐色  | 粘質シルト | φ 2~5mm炭粒含む。他の埋土に比べて固くしまる。                 |                      |
| 7  | 7.5YR5/6 | 明褐色 | 粘質シルト | φ 30mm程度炭化物含む。土器細片含む。                      |                      |
| 8  | 7.5YR5/8 | 明褐色 | 粘質シルト | φ 1mm程度白色砂含む。                              |                      |
| 9  | 7.5YR5/8 | 明褐色 | 粘質シルト | φ 1~3mm白色砂多量に含む。シャリシャリ。                    |                      |
| 10 | 7.5YR4/6 | 褐色  | 粘質シルト |  |                      |
| 11 | 7.5YR6/8 | 橙色  | 砂質シルト | φ 5~20mm白色・黄色・橙色砂岩(?)ブロック多量に含む。シャリシャリ。     |                      |

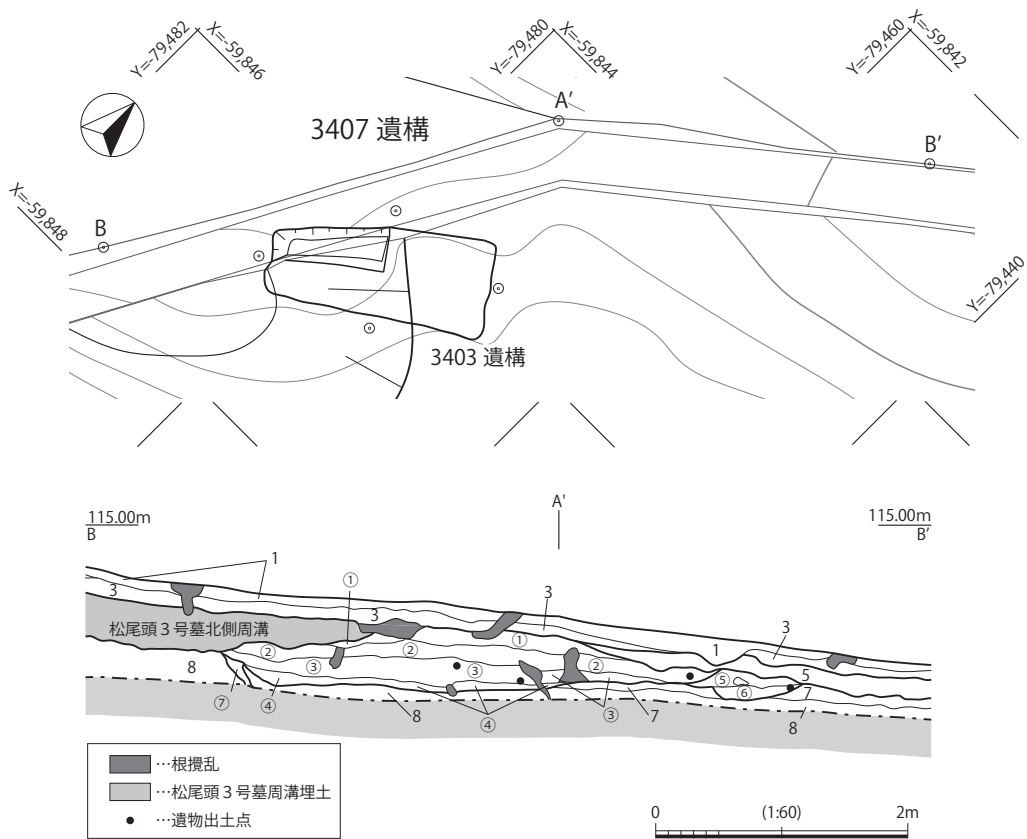


第37図 3403遺構平面・土層断面図

質の層が水平に堆積していることから、貼床の可能性はある。3407 遺構埋土を分析した結果、種子炭化物が出土している。また、年代測定の結果は、遺物の年代と齟齬が少ない（第V章第5節参照）。遺物は、①～③層から土器片が出土し（第51図）、黒曜石の剥片も確認している。Po60については赤色顔料分析を行い、外器面にベンガラが付着していたことが判明した（第V章第6節参照）。出土遺物から、3407 遺構の埋没時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

(3) 10区北東部（第36図）

北東部東側斜面では弥生時代終末期の遺構は確認できなかったため、遺物包含層2を掘削して遺物包含層2の下面で遺構検出を行った。その結果、北東端（3404 遺構）やAベルトとBベルトが交差



<遺構層序>

①	10YR3/3	暗褐色	粘質シルト	固くしまる。φ1mm程度白色砂含む。φ1~5mm炭粒含む。土器片含む。②層の土壌化層。	} 3407遺構
②	10YR4/6	褐色	粘質シルト	固くしまる。φ1mm程度白色砂含む。φ1~5mm炭粒含む。土器片含む。角柱状ブロックあり。	
③	10YR4/4	褐色	粘質シルト	しまるが空隙あり。全体的に土がブロック状になり、②層よりも角柱状ブロックが多い。φ1~10mm炭粒含む。土器片含む。	
④	5YR5/6	明赤褐色	粘質シルト	φ1mm程度白色砂含む。φ1mm程度炭粒含む。φ1mm程度炭粒ごくわずかに含む。	} 別遺構か
⑤	10YR3/4	暗褐色	砂質シルト	φ1~5mm炭粒含む。	
⑥	7.5YR3/2	黒褐色	粘質シルト	φ1~2mm炭粒含む。土器片含む。	
⑦	10YR3/4	暗褐色	粘土	固くしまる。3407遺構に伴うものか不明。	

<基本層序>

1	10YR4/3	にぶい黄褐色	粘質極細粒砂	根の攪乱が著しい。腐植混じる。極粗粒砂・礫含む。	□表土
3	7.5YR4/4	褐色	粘質シルト		□第1層
5	10YR3/2	黒褐色シルト	黒ボク		□第3層
7	10YR4/2	灰黄褐色	粘質シルト	第2層がブロック状に混じる	□第4層(基盤層風化)
8	7.5YR5/6	明褐色	粘土(ローム)		□第5層(基盤層)

※基本層序は、第19図の層番号に対応。

第38図 3407 遺構土層断面及び遺物分布図

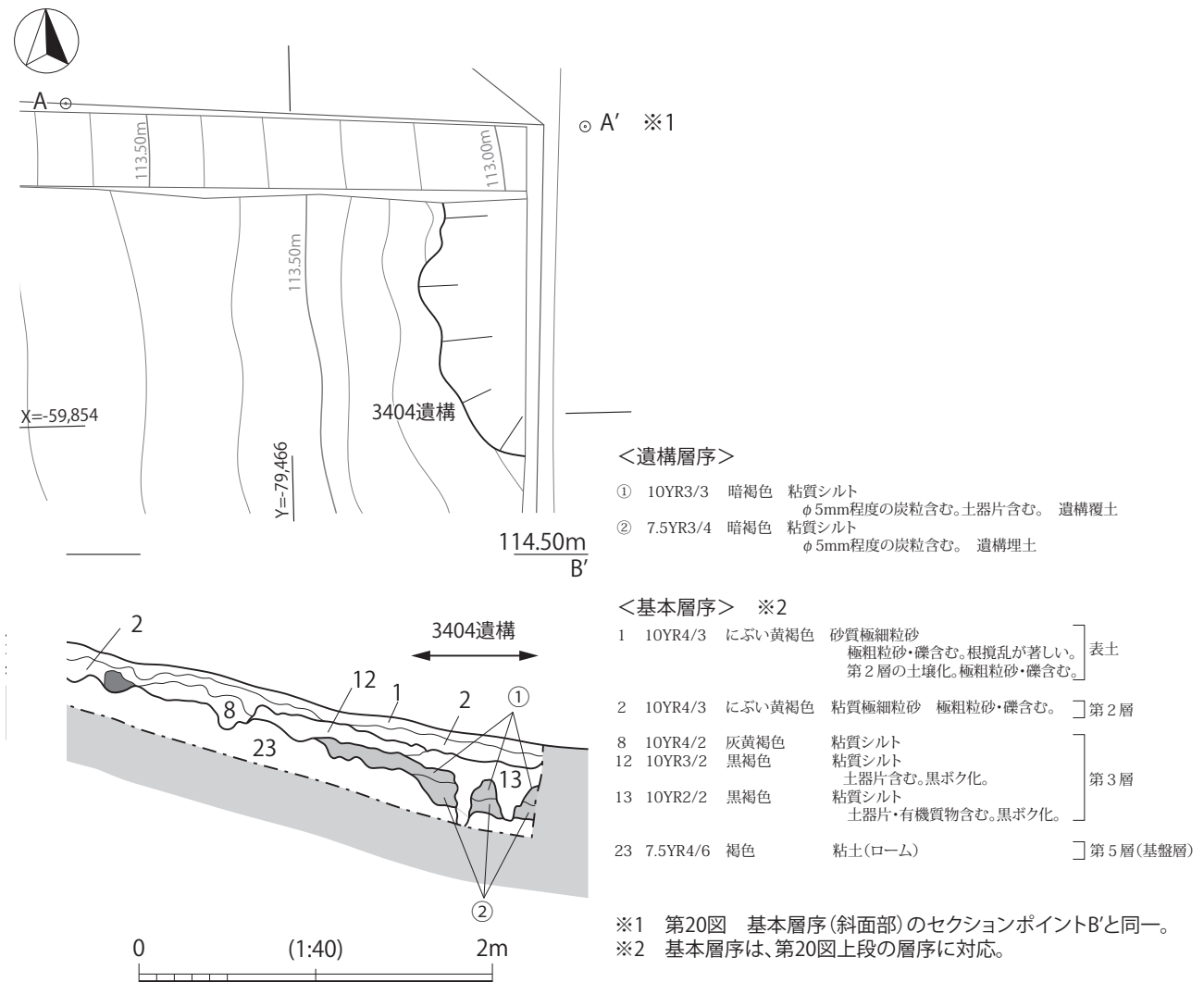
する地点（3406 遺構）で土坑の可能性が高い遺構、溝状の遺構（3405 遺構）を確認したが、そのほかに目立った遺構はなく、性格不明のピットを検出したのみであった。これまでの妻木晩田遺跡の遺構分布をみても、丘陵頂部は堅穴住居などの大型の遺構は少なく、丘陵から少し下がった地点に分布することが多いことから、今回の調査範囲外の丘陵斜面付近に存在する可能性がある。

① 3404 遺構（第 39 図）

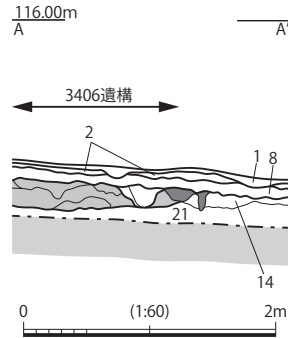
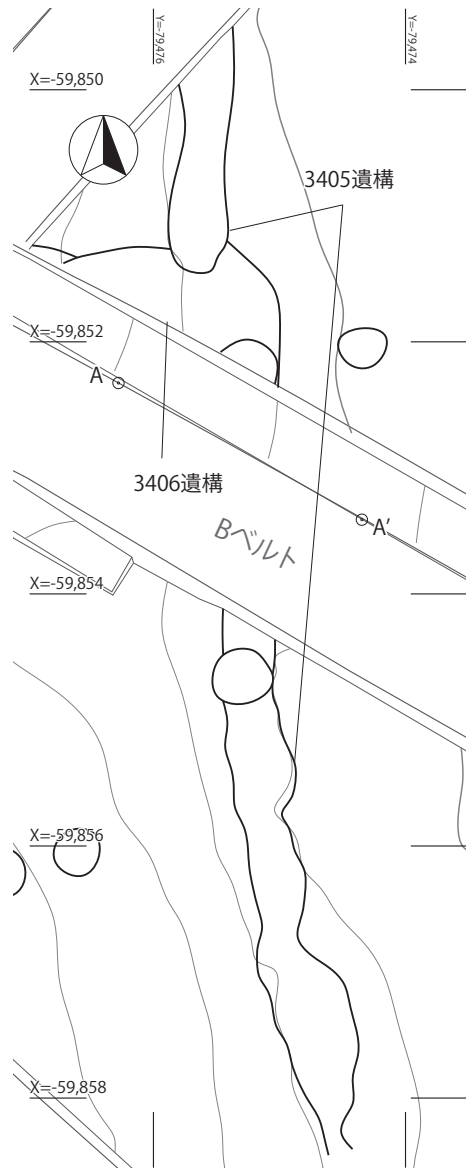
Bラインの北東端で検出した遺構であり、土坑の可能性はある。ほとんどが調査区外にあるため全体形は不明である。検出範囲における遺構の規模は、東西 1.89 m、南北 0.58 m、深さ 0.2 mである。遺構内から遺物は出土しなかったが、3404 遺構を覆う 2・3層から弥生時代後期前葉の遺物が出土している（第 52 図 Po74）。

② 3405 遺構（第 40 図）

Cライン付近で検出した溝状遺構である。ほぼ真北から真南方向に向かう。北側はAベルトより先に続いているものとみられる。土層断面は、Cベルトで確認しており、3406 遺構を切ることがわかっている。検出できた規模は、南北（長さ）8.85 m、幅約 0.56 m、深さ 0.17 mである。遺構内には土器の小片が含まれる。遺構上面で出土した土器から、時期は弥生時代後期以降とみられる（第 51 図 Po51）。



第 39 図 3404 遺構 平面・土層断面図



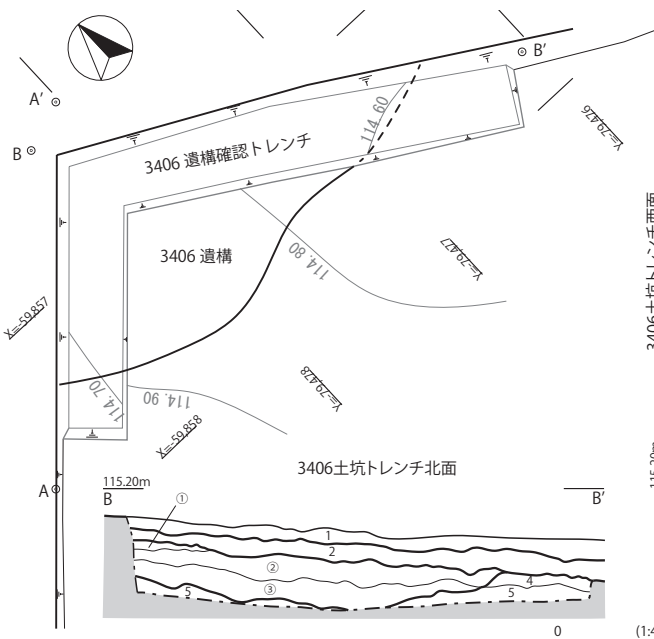
<遺構層序>

- ① 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト  
10YR3/4暗褐色粘質シルトブロック40%含む  
(下方に多い)。
- ② 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト

<基本層序>

- |    |   |          |
|----|---|----------|
| 1  | 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト<br>腐植まじり。根攪乱が著しい。第2層の土壌化。<br>極粗粒砂・礫含む。                    | 表土       |
| 2  | 10YR3/3 暗褐色 粘質シルト 極粗粒砂・礫含む。   | 第2層      |
| 8  | 10YR2/2 黒褐色 粘質シルト<br>10YR3/2黒褐色粘質シルトブロック40%含む。<br>土器片(須恵器・弥生土器)・石器含む。度炭粒含む。 | 第3層      |
| 14 | 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト<br>10YR2/2黒褐色粘質シルトブロック30%含む。<br>φ2~3mm炭粒含む。               | 第4層      |
| 21 | 7.5YR4/4 褐色 粘土(ローム) 固くしまる。  | 第5層(基盤層) |

第40図 3405 遺構平面・土層断面図



<遺構層序>

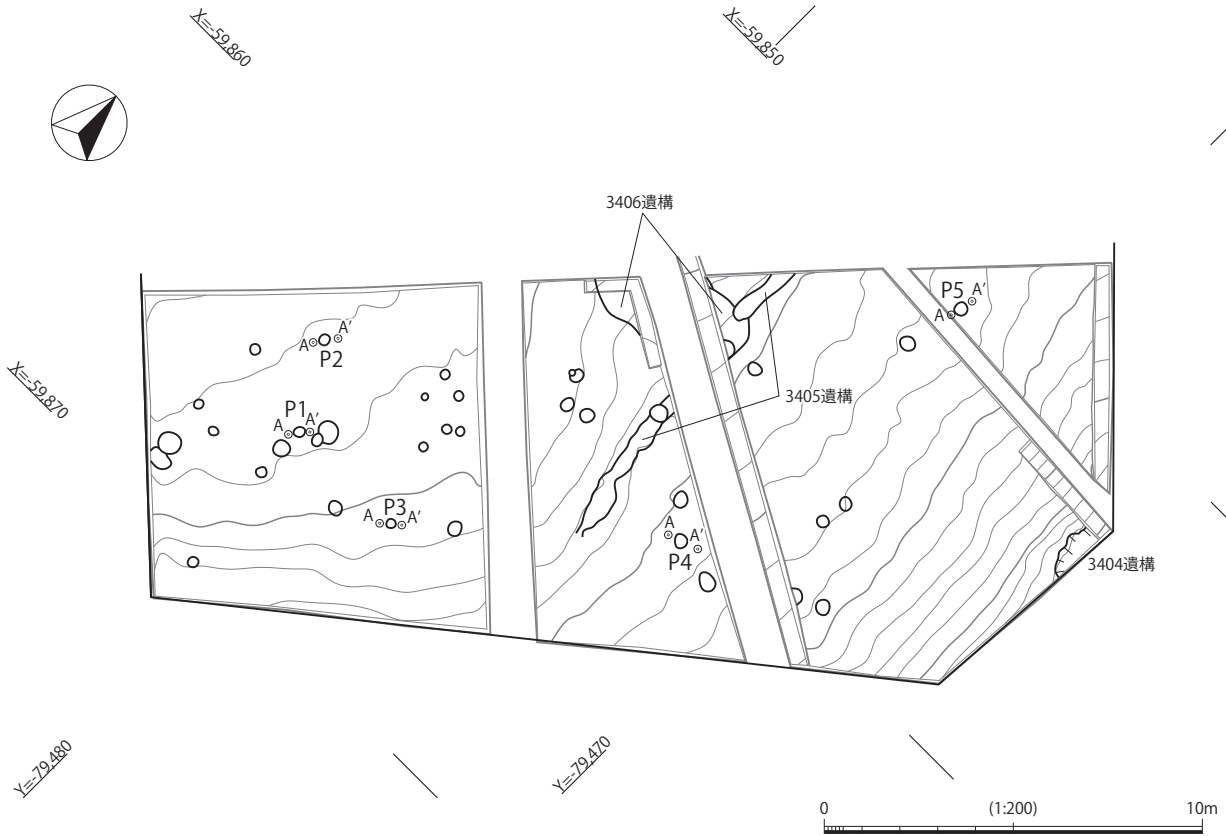
- ① 10YR4/4 褐色 粘質シルト  
φ1mm程度炭粒含む。  
第2層に比べしまる。
- ② 10YR4/4 褐色 粘質シルト  
φ1~5mm炭粒含む。  
第4層に比べて空隙が多い。  
しまりもやや弱い。
- ③ 7.5YR4/4 褐色 粘質シルト  
φ1~2mm炭粒含む。  
空隙があり、第5層に比べてしまる。

<基本層序>

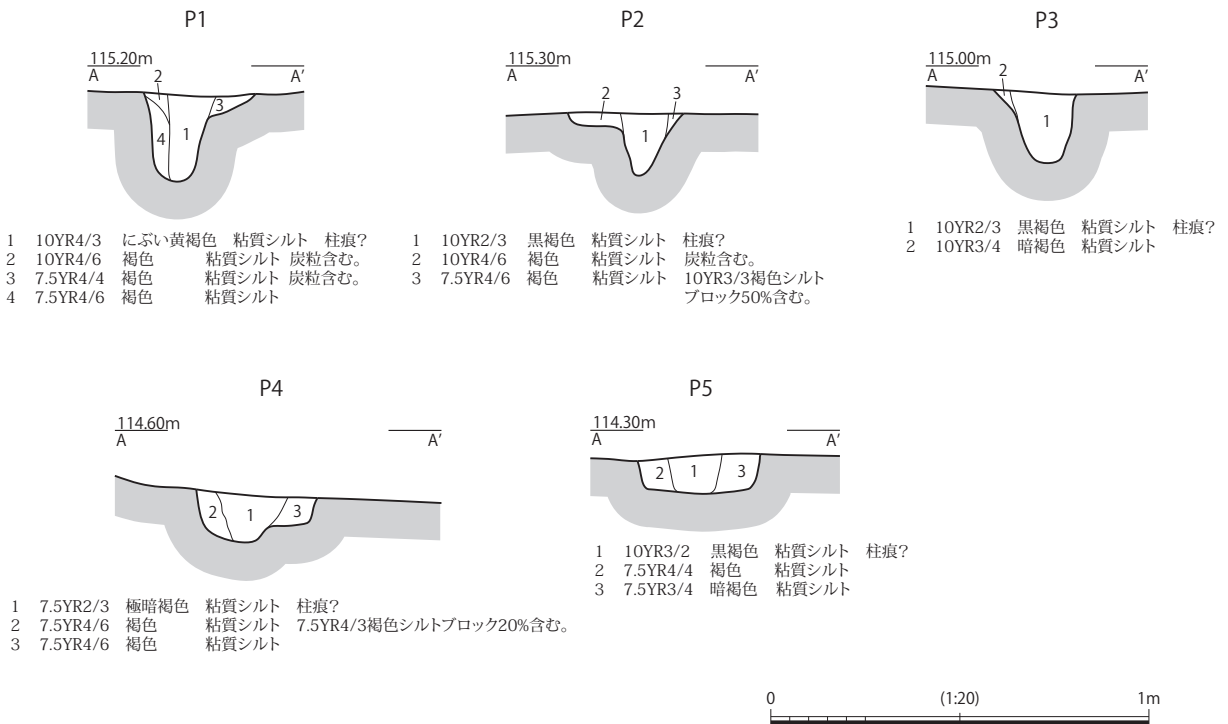
- |   |   |          |
|---|---|----------|
| 1 | 10YR3/4 暗褐色 砂質極細粒砂<br>極粗粒砂・礫含む。<br>根攪乱が著しい。                       | 表土       |
| 2 | 10YR3/4 暗褐色 粘質シルト<br>φ1~2mm炭粒含む。                                  | 第3層      |
| 3 | 10YR4/6 褐色 粘質シルト<br>10YR4/3にぶい黄褐色<br>シルトブロック40%含む。<br>φ1~2mm炭粒含む。 |          |
| 4 | 10YR4/6 褐色 粘土(ローム)  | 第5層(基盤層) |
| 5 | 7.5YR4/4 褐色 粘土(ローム)   |          |

第41図 3406 遺構平面・土層断面図



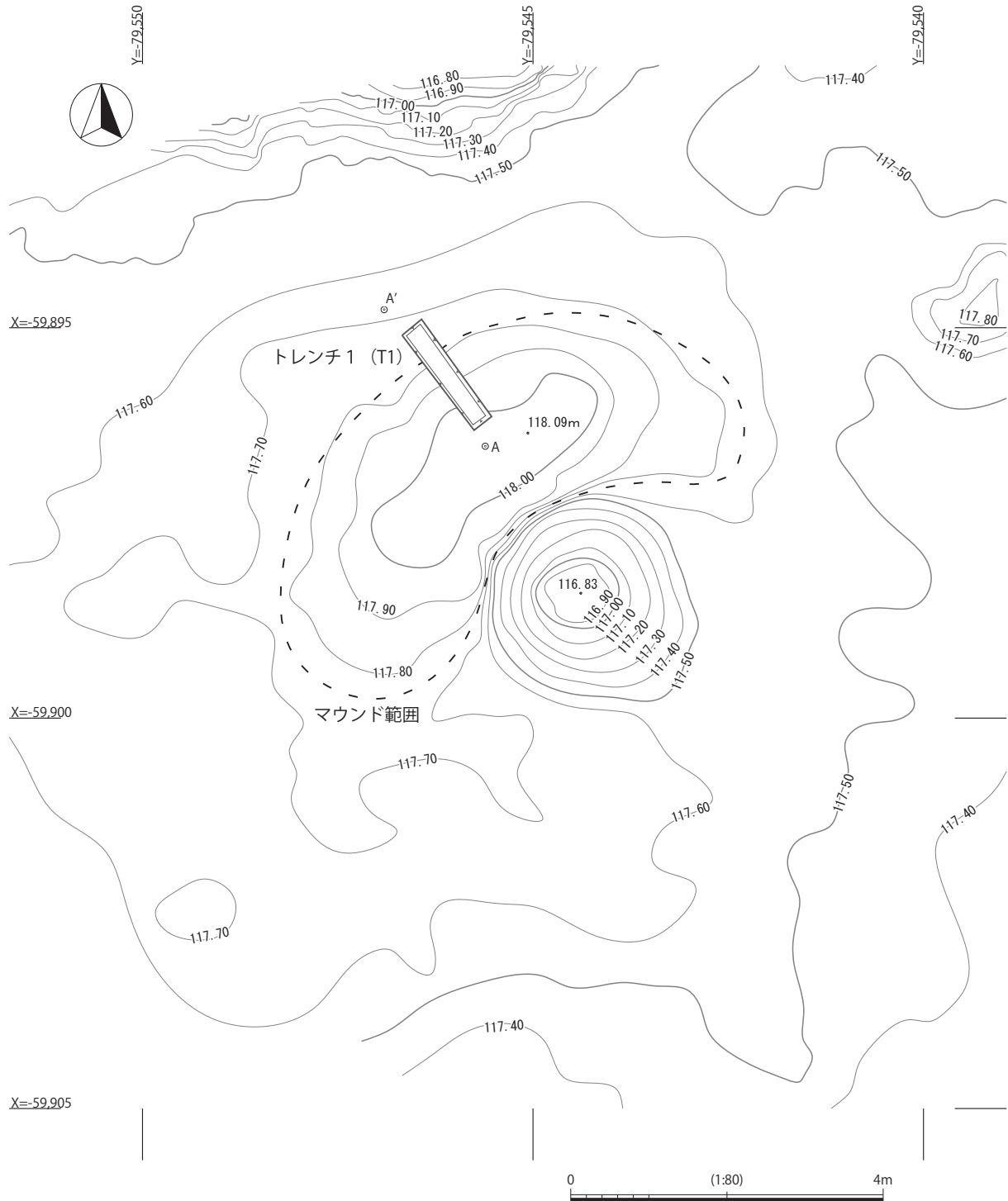


<各ピット位置図>



<各ピット断面図>

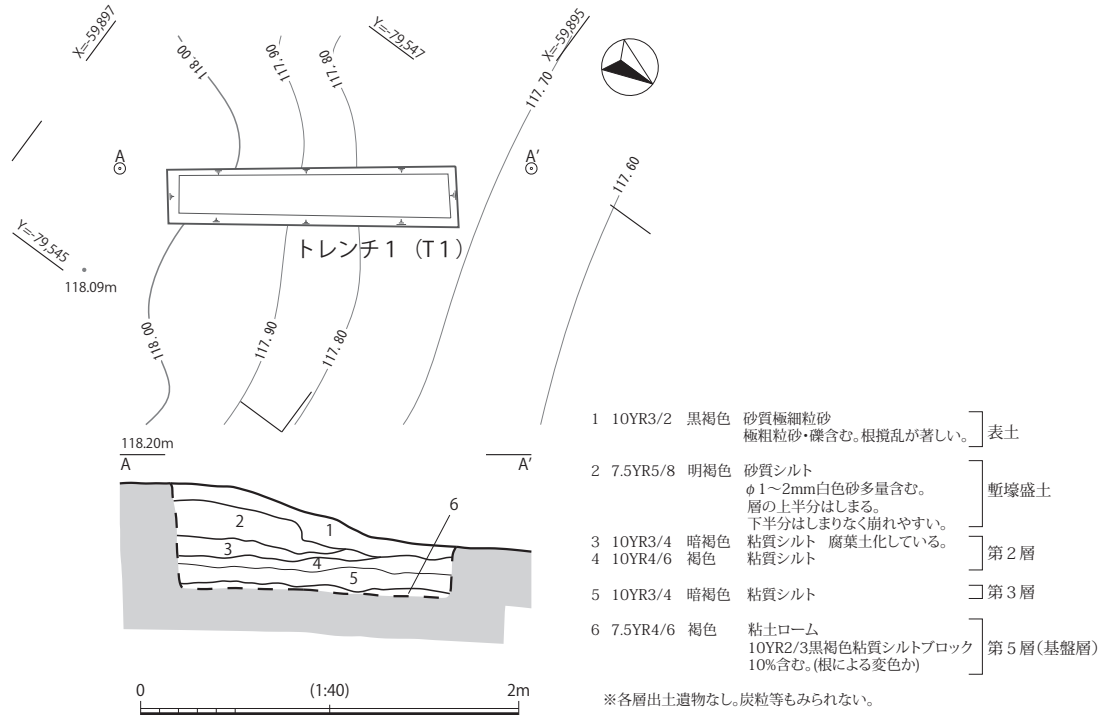
第 42 図 半裁ピット土層断面図



第 43 図 マウンド状地形 E 地形測量図

③ 3406 遺構 (第 41 図)

C ライン付近で検出した土坑状遺構である。C ライン断面では、3405 遺構や複数のピットに切られる。堆積を確認するため、さらに A ベルト・B ベルトに沿ってサブトレンチを設定して調査を行った。その結果、遺構の平面形状は隅丸長方形であり、遺構の規模は、東西 4.4 m、南北 2.0 m、深さ 0.26 m である。埋土は水平に 2 層堆積するが、炭化物を含むのみで遺物は出土しなかったため、遺構の性格は不明である。自然科学分析の結果から、遺構の時期は概ね弥生時代中期後葉～後期前葉頃とみられる (第 V 章第 6 節参照)。



第44図 トレンチ1平面・土層断面図

④ピット群 (第42図)

ピットは北東部調査区東側の範囲で37基確認した。そのうち埋土の異なる10基について半裁して土層堆積を確認した結果、そのうち5基を柱痕状の堆積から遺構と認めた(第42図P1~5)。よって、P1~5と同じ埋土が確認できるものは、遺構の可能性が高い。ピット群にはまともではなく、建物や柵列のように列状になるものも認められなかったため、遺構の性格は不明であるが、P1~3については断面から杭状のものと考えられる。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。ただし、Cベルトのトレンチを調査した際ピットの範囲で出土した遺物(第52図Po71)は弥生時代後期前葉~中葉を示す。

(4) 10区南西部 (第18図)

10区西側では、第28次調査において5号墓の南側に設定したTr.17で弥生時代後期中葉の竪穴住居(焼失住居)を検出している(第13図)。それ以外の地点でも明確な窪地が存在し、丘陵の稜線からなだらかに下る東側の傾斜変換点から緩斜面に竪穴住居等が分布することが想定できる。第34次調査では10区西側でもトレンチ調査を行う計画であったが、松尾頭墳丘墓群の調査を優先したため実施しなかった。松尾頭10区の丘陵全体の遺構分布については将来的な課題としたい。

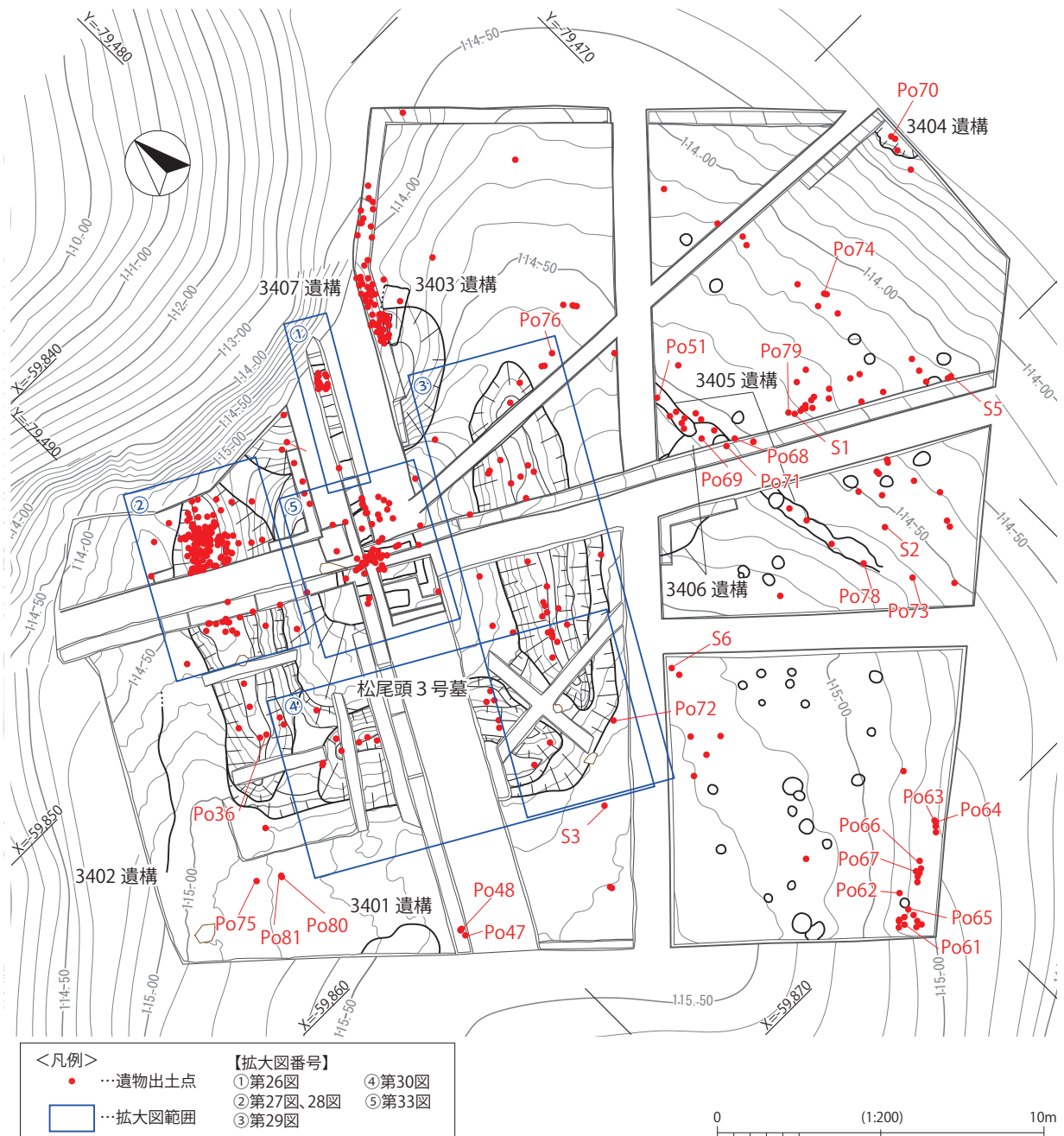
(5) 太平洋戦争末期の遺構 (第43、44図)

マウンド状地形Eは、松尾頭10区の丘陵上で最南端に位置する。第28次調査の踏査で確認し、墳丘墓や古墳の可能性があるので、今回トレンチ調査を行った。

マウンド状地形Eは、東側はほとんど平坦で西側が高い三日月状に近いマウンドを持ち、マウンドの最高点はこの丘陵で最も高い標高118.09mである。そして、マウンドの中央には、盗掘坑のような円形の坑が確認できた。まずはマウンドと円坑の関係を確認するため、マウンド上や坑内の落ち葉等を除去し、マウンドの正確な形を測量した(写真14)。その結果、坑は正円形で深さは0.7mであり、坑の東側には明確なマウンドを持たないことが判明した(第15図)。過去の松尾頭9区の調査

において、同様のマウンドを持つ太平洋戦争末期の立射式塹壕（たこ壺）が複数基確認されており（鳥取県教育委員会 2011）、マウンド状地形 E は墳丘墓ではない可能性が高まった。よって、当初は坑の部分を含めて十字にトレンチを設定する予定であったが、マウンドの堆積のみ確認することとし、マウンド中央の頂部から北西側に幅 30cm、長さ 150cm のトレンチ 1（T1）を設定した。

調査の結果、マウンドの堆積は基盤層掘削土であり（第 44 図 2 層）、その下に基本層序第 2 層に相当する腐植土層（3 層）が確認できた。マウンドは表面だけ締め固められており内部は全く締まりがなく、弥生墳丘墓の盛土とは堆積状況が異なる。マウンドの厚さは約 20cm、腐植土層を含めると約 30cm である。さらに、腐植土層の下は基本層序第 3 層相当層が水平に堆積し、直下に基盤層となる粘土ロームを検出した。これらのことから、地表面の落ち葉や草木を一緒に掘って盛った最初の堆積が第 44 図 3 層であり、引き続いて一人用の穴を掘ってその西側に基盤層の掘削土を積み上げて土塁と



第 45 図 松尾頭 10 区北東部遺物分布図

した作業手順が想像でき、規模や坑の深さが過去に調査された塹壕や文献と類似することから、この遺構は太平洋戦争末期の塹壕であると断定した<sup>註2</sup>。なお、T1の調査では古い時代の遺構は検出できず、トレンチ内や周辺を含めて、近代や弥生時代の遺物は出土していない。

## 第6節 出土遺物

### (1) 調査区全体の遺物出土状況

報告書作成にあたり、第28次調査を含めて墳丘墓に関わる出土遺物の接合関係と個体数を確認した。過去の年報掲載の遺物も含まれるが、中には再実測したものや第34次調査出土遺物と接合したものがあつた。調査全体で出土した遺物は破片が多く、完形品はごくわずかである。土器については、個体数として認識できたのは10区全体で81点であり、内、3号墓からは40点が出土した(第46～53図)。3号墓からはこのほかに、土製品1点、鉄器1点が出土している。4号墓、5号墓は点数が少なく、個体としてはそれぞれ2点と3点で、マウンド状地形E付近では遺物が出土していない。

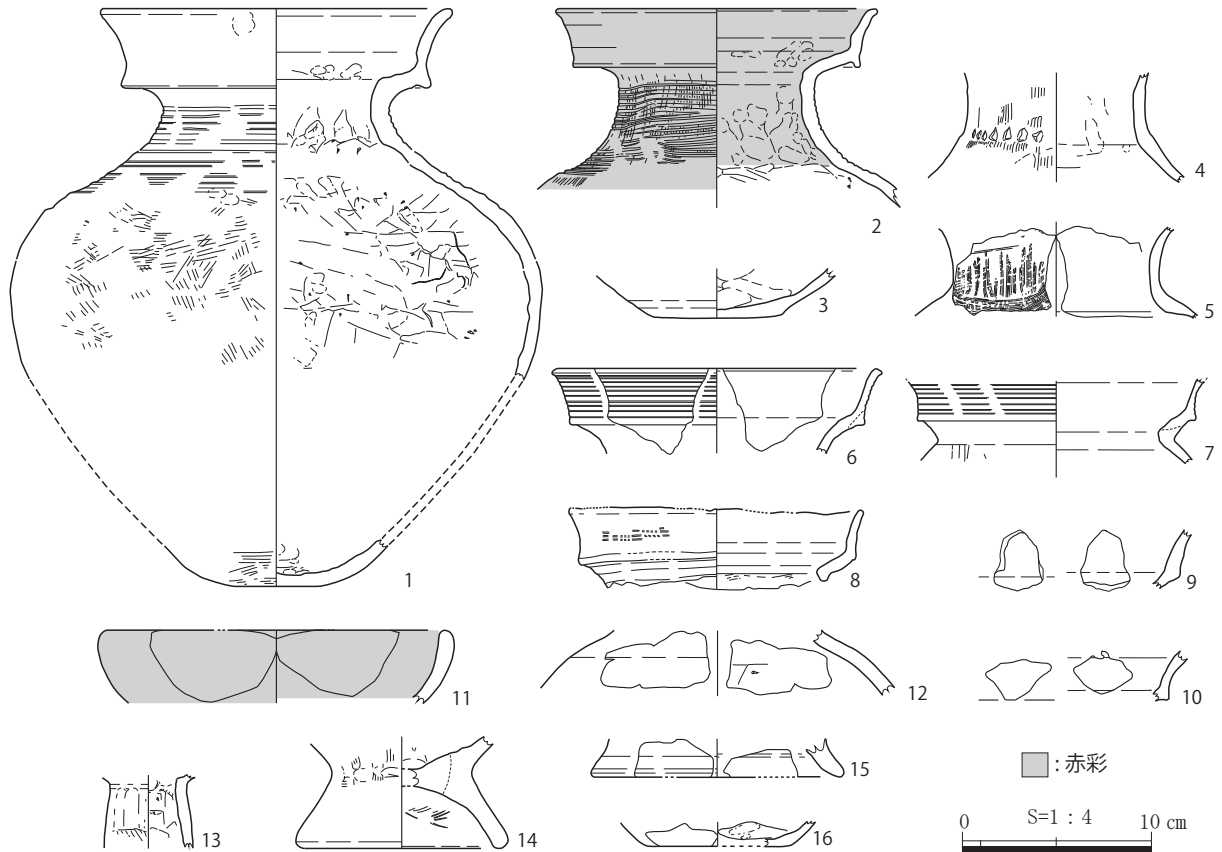
10区北東部では、表土、第2層、第3層から弥生土器、須恵器、石器が出土している。また、10区丘陵平坦面では石器を、北東側斜面部では須恵器を表採している。

### (2) 松尾頭3号墓(第46～48図)

3号墓では、表土、周溝、墳頂部、盛土、第3層から弥生土器が出土している。識別できた個体数は、3号墓の築造時期とみられる弥生時代終末期前半に該当するものが29点、弥生時代後期または時期不明のものが13点である。器種は壺、甕、高坏、器台があり、ほとんどが壺・甕で、高坏・器台の点数は少ない。出土位置は西側周溝が最も多く、墳頂部、北側周溝がそれに次ぐ。墳頂の遺物は小片であること、それぞれから出土した遺物に同一個体が確認できたこと、周溝内の出土状況から破片の位置が広範囲に広がることから、墳頂部で祭祀に使用された土器が転落して周溝内に散逸したと想定できる。

3号墓出土遺物の中で特筆すべきは、吉備北部地域の土器を模倣した「模倣土器」が含まれる点である<sup>註3</sup>(第46図Po1・2、第47図Po17・24)。いずれも壺であり、西側周溝、北側周溝、墳頂部から出土した。模倣土器と判断した特徴の一つは、頸部をタテハケ調整後、多条の沈線が引かれている点である。さらに全体のプロポーシヨンをみると、いずれも口縁部は在地の形態をとるが、特にPo1・2・24は頸部がハ字状に開いて胴部が張り、複合口縁内側が明瞭な平坦面をもって屈曲し頸部に至る点は、当該期の在地の土器にはみられない特徴である。

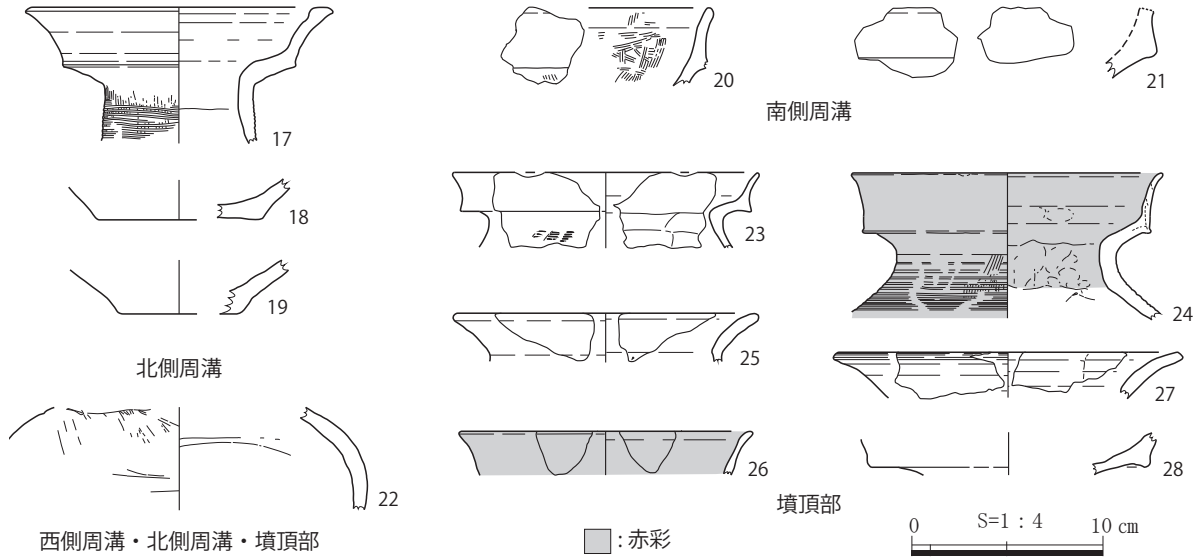
以上を踏まえ、各遺物の詳細について説明する。Po1～5、17、24は壺である。Po1・2・17・24は頸部にタテハケ調整後多条の沈線を施す。Po3は出土位置からPo2の底部と考えられるが接点はない。平底を呈し、胴部にむけての立ち上がり方から、Po1と同様の形態であったと推察できる。Po4は頸部に板状工具小口の刺突による列点文を施す。頸部下に列点文を施文する壺は当該期の在地土器には見当たらず、他地域の影響を受けた可能性がある。Po5は外面に細かく丁寧なミガキを施す。Po1は胎土に赤色顔料を練り込んでおり、赤褐色に発色し、Po2・24は外器面と内器面の頸部下端まで赤色顔料が塗布されている(第V章第6節参照)。Po21・25・27は壺の口縁部の可能性がある。Po6～10・20は甕口縁部である。擬凹線文を残すもの(Po6・7)とナデ消すもの(Po8)がある。Po23は甕口縁部から肩部にかけて残存しており、肩部にハケ状工具を用いた連続刺突



第46図 松尾頭3号墓西側周溝出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
						器高	口径	底径					
1	(34MG) 35、100、122ほか (33MG) 61、65 (28MG) 86、87、99ほか	10区 北東部	埋土①、②	壺	口縁部～ 頸部	△ 30.6	※ 18.4	※ 4.4	外面：口縁部ナデ、頸部貝殻腹縁による多条沈線、 肩部～底部ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部指押さえ、ナデ、絞り痕、 肩部～胴部指押さえ成形後、ハケ状工具 によるケズリ、底部指押さえ	密	良好	外面：橙 内面：橙～明赤褐	胎土に ベンガ ラ多い
2	(34MG) 49ほか (33MG) 69 (28MG) 78ほか	10区 北東部	埋土②	壺	口縁部～ 肩部	△ 10.5	※ 17.0	-	外面：口縁部ナデ、頸部貝殻腹縁による多条沈線 内面：口縁部ナデ、頸部ナデ、指押さえ、絞り痕 肩部ケズリ	密	良好	外面：明黄褐 内面：明黄褐	表面に ベンガ ラ
3	(34MG) 163ほか	10区 北東部	埋土②	甕?	底部	△ 2.6	-	7	外面：ナデ、ミガキ 内面：指押さえ	密	良好	外面：黄橙 内面：にぶい黄橙	
4	(34MG) 31、41ほか	10区 北東部	埋土①	壺	頸部	△ 5.8	-	-	外面：頸部ナデ、列点文、ハケメ 内面：ハケメ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
5	(28MG) 92	28MG Tr. 7		壺	頸部	△ 4.8	-	-	外面：頸部ミガキ 内面：頸部ナデ?、頸部下ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
6	(34MG) 121	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 4.5	※ 16.8	-	外面：口縁部 10条擬凹線文、頸部ナデ 内面：口縁部～頸部ナデ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
7	(34MG) 104、120	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 4.6	-	-	外面：口縁部貝殻腹縁による擬凹線文後ナデ、 頸部ナデ、下半タテ方向ハケメ 内面：口縁部ナデ、頸部上半ナデ、下半ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
8	(33MG) 76	10区 北東部	埋土②	甕	口縁部 (完形)	△ 4.4	※ 15.6	-	外面：口縁部貝殻腹縁による擬凹線文後ナデ消し、 口縁下部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ?	密	良好	外面：浅黄橙～褐灰 内面：にぶい黄橙	
9	(34MG) 45	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 3.1	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
10	(34MG) 60	10区 北東部	埋土①	甕	口縁部	△ 2.2	-	-	外面：ナデ、指押さえ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	
11	(28MG) 268-1	28MG Tr. 7	床直	高坏	口縁部	△ 3.9	※ 18.0	-	外面：口縁部ヨコ方向ハケメ、ナデ 内面：ヨコ方向ケズリ後ナデ	密	良好	外面：赤～にぶい黄褐 内面：にぶい赤褐	ベンガ ラ塗布
12	(34MG) 32ほか	10区 北東部	埋土①	甕?	胴部	△ 3.4	-	-	外面：ナデ 内面：ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい橙	
13	(34MG) 156	10区 北東部	埋土① 下面	高坏	脚部	△ 3.8	-	-	外面：脚接合部ナデ、脚部ミガキ、脚部下半ハケメ 内面：ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
14	(28MG) 80、96	28MG Tr. 7	埋土①	低脚坏?	脚部	△ 5.9	※ 10.6	-	外面：口縁部ナデ、頸部指頭圧痕、下半ハケメ 内面：口縁部ミガキ?、頸部下半指頭圧痕とナデ?	密	良好	外面：にぶい橙～ にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
15	(28MG) 268-2	28MG Tr. 7	埋土② 下面	甕	脚部	△ 2.2	※ 15.6	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄褐 内面：にぶい黄褐	
16	(34MG) 67、136	10区 北東部	埋土①	不明	底部	△ 1.3	-	※ 7.8	外面：風化内面：指押さえ	やや粗	良好	外面：橙 内面：にぶい橙	

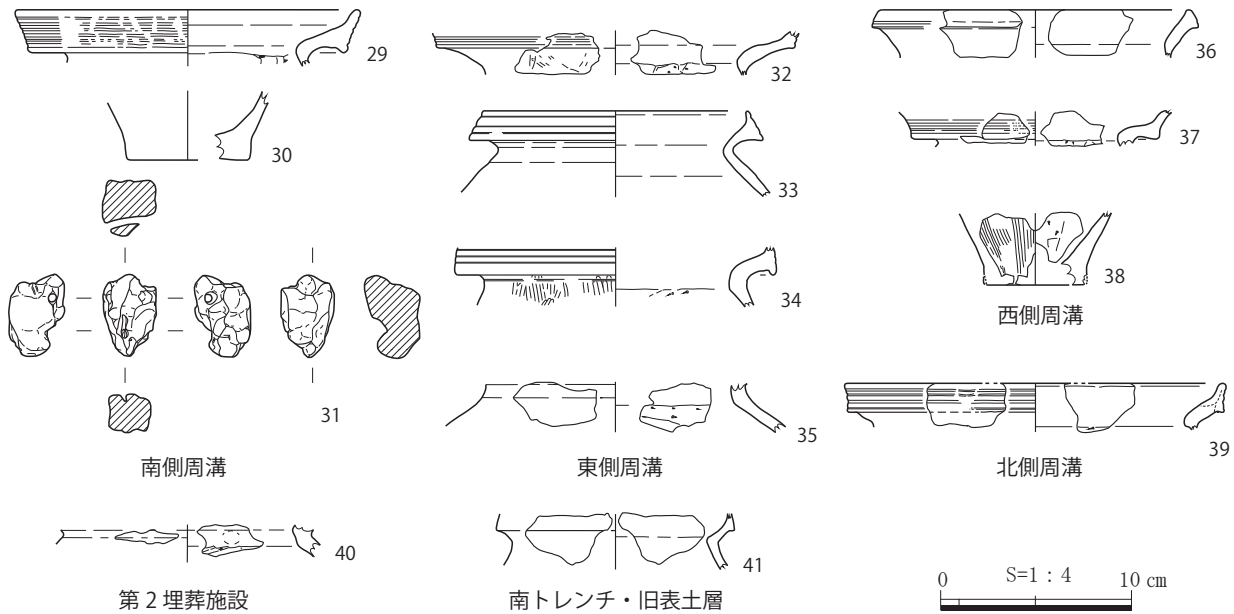


第47図 松尾頭3号墓北・南側周溝、墳頂部出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径					
17	(33MG) 21、22、24、29、30、32、33、34、38、41	10区北東部	北側周溝	埋土①下面	壺	口縁部～頸部	△7.1	※15.6	-	外面：口縁部ナデ 頸部上半タテハケ後ナデ、 頸部下半に貝殻腹線による 多条沈線文 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ?	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
18	(33MG) 40	10区北東部	北側周溝	埋土①下面	壺?	底部	△2.1	-	※8.6	内外面とも風化により調整不明	密	良好	外面：灰黄褐 内面：明黄褐	
19	(33MG) 31	10区北東部	北側周溝	埋土①下面	壺?	底部	△2.8	-	※6.0	内外面とも風化により調整不明	密	良好	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	
20	(33MG) 72	10区北東部	南側周溝	埋土②	壺	口縁部	△5.1	-	-	外面：口縁下端部以下ナデ? 内面：ミガキ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
21	(28MG) 171	28MG Tr10	9溝(南側周溝)	上面	壺	口縁下部	△3.6	-	-	外面：ナデ 内面：風化により調整不明	密	良好	外面：浅黄橙 内面：橙	
22	(34MG) 81、88、89、114、190、254、(33MG) 10 (28MG) 260	10区北東部	西側周溝 北側周溝 墳頂部	埋土① 埋土① 表土	壺	胴部	△5.35	-	-	外面：肩部に擬凹線文、胴部ハケメ 内面：ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：灰黄	
23	(33MG) 1	10区北東部	墳頂部 17土坑	表土上面	壺	口縁部～肩部	△3.9	※15.8	-	外面：肩部にハケ状工具による連続 刺突文 内面：頸部ヘラケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
24	(28MG) 176、177	10区北東部	墳頂部	表土	壺	口縁部～肩上部	△7.6	※16.2	-	外面：口縁部ハケ状工具によるナデ、 頸部タテ方向のハケメ後11条 以上の多条沈線文 内面：口縁部ナデ、指押さえ 頸部指押さえ後ナデ、ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	ベンガラ塗布
25	(34MG) 22 (33MG) 13、140	10区北東部	墳頂部 17土坑	上面	壺	口縁部	△2.5	※15.4	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄～ 橙 内面：にぶい黄～ 灰黄褐	
26	(34MG) 10	10区北東部	墳頂部 攪乱	下層	高坏?	口縁部	△2.3	※15.2	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい橙 内面：にぶい橙	内外面 赤彩
27	(34MG) 21	10区北東部	墳頂部 17土坑	上面	壺?	口縁部	△2.4	※17.8	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	外面：にぶい黄橙 ～褐灰 内面：にぶい黄橙	
28	(34MG) 199	10区北東部	墳頂部	表土 第2層	器台	口縁部	△2.2	-	-	外面：ナデ 内面：風化により調整不明	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	

文を施す。Po 8は本章第3節でも触れたが、出土状況と頸部の破面状態から器台として転用されたものとする。Po12は甕か壺の肩部、Po22は壺肩部にあたり、頸部との境界付近に擬凹線文を施す。Po16・18・19は壺か甕の底部であり、平底を呈す。Po16は二次的に比熱している。Po11・26は高坏の坏部の可能性がある。Po13は高坏脚部である。調整は不明瞭で器壁も薄い。Po14・15は低脚坏



第48図 松尾頭3号墓出土遺物

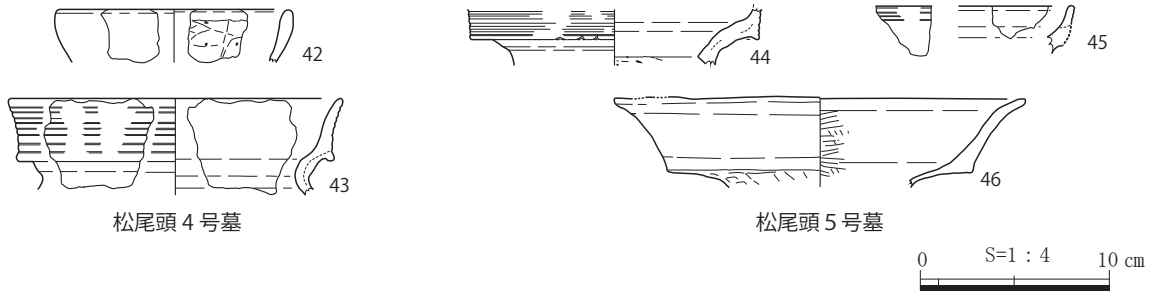
遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径					
29	(33MG) 74 (28MG) 170	10区 北東部	南側周溝	埋土 ②	壺	口縁部~ 頸部	△ 3.0	※ 18.0	-	外面：口縁部6条の平行沈線文 口縁部下~頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
30	(33MG) 73	10区 北東部	南側周溝	埋土 ②	壺	底部	△ 3.6	-	※ 6.4	内外面とも風化により調整不明	密	良好	外面：明黄褐 内面：黄褐	
31	(33MG) 57	10区 北東部	南側周溝	埋土 ①下面	土製品	-	長 4.3	幅 2.8	厚 2.9	外面被熱、破面5面、貫通孔1、未貫通孔1	密	良好	外面：明黄褐	
32	(33MG) 7	10区 北東部	東側周溝	表土 上面	壺?	口縁部	△ 2.3	-	-	外面：口縁部に2条以上の凹線文 口縁部下~頸部上半ナデ・下半ハケメ 内面：口縁部~頸部工具ナデ・頸部下ケズリ	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい黄橙	
33	(34MG) 12	10区 北東部	東側周溝	埋土 ①	壺	口縁部~ 胸部	△ 4.5	※ 13.8	-	外面：口縁部に行沈線3条、頸部ナデ 内面：口縁部ナデ、頸部上半ナデ・下半ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：にぶい黄橙	外器ス ス付着
34	(33MG) 75	10区 北東部	東側周溝	埋土 ②	壺	口縁部~ 頸部	△ 3.1	-	-	外面：口縁部ナデ、頸部以下ミガキ 内面：口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	やや粗	良好	外面：黄橙 内面：橙	口縁端 部欠損
35	(34MG) 6	10区 北東部	東側周溝	埋土①	壺	頸部	△ 2.6	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ、指押さえ、ケズリ	やや粗	良好	外面：灰黄褐 内面：にぶい黄褐	
36	(33MG) 82	10区 北東部	西側周溝	埋土 ②	壺	口縁部	△ 2.5	※ 16.0	-	外面：口縁部に本数不明の沈線? 内面：風化により調整不明	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 内面：浅黄橙	
37	(34MG) 115	10区 北東部	西側周溝	埋土 ②	壺	口縁部	△ 1.8	-	-	外面：口縁部擬凹線文後ナデ消し 内面：口縁部~頸部上半ナデ、頸部下ケズリ	やや粗	良好	外面：にぶい黄橙 ~灰黄褐 内面：にぶい黄橙 ~灰黄褐	
38	(33MG) 118	10区 北東部	西側周溝	埋土	壺	底部	△ 3.8	-	※ 5.2	外面：ハケメ 内面：ケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
39	(34MG) 82	10区 北東部	北側周溝	埋土①	壺	口縁部~ 頸部	△ 2.6	※ 20.0	-	外面：口縁部に4条の凹線文 口縁部下~頸部ナデ 内面：口縁部~頸部上半ナデ、頸部下ケズリ	密	良好	外面：にぶい黄褐 内面：にぶい黄橙	
40	(34MG) 251	10区 北東部	第2埋葬施設	埋土	壺	頸部	△ 1.7	-	-	外面：ナデ内面：ナデ、ヘラケズリ	密	良好	外面：橙 内面：橙	
41	(34MG) 246	10区 北東部	墳頂部 南東 Tr.	旧表土層	壺	頸部	△ 2.9	-	-	外面：ナデ内面：ナデ	密	良好	外面：浅黄橙 内面：浅黄橙	

の脚部とみられる。Po28は器台の受部である。F 1は、東側周溝の底面付近から出土した有茎柳葉式の鉄鏃で、3号墓に伴うとみられるが、出土位置を含め遺物の性格については不明である(第50図)。

3号墓よりも古い時期の遺物も13点出土している。ほとんど甕だが、南側周溝から出土したPo31は不定方向の穿孔が3方向にある用途・時期不明の土製品である。各遺物の時期は、Po33・36・41





第49図 松尾頭4号墓・5号墓出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm, ※:復元, △:残存)	調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径				
							底径					
42	(34MG) 315	34MG T2	松尾頭4号墓	墳丘直上	鉢?	口縁部~頸部	△ 2.8 ※ 12.2 -	外面: 口縁部ナデ 内面: 口縁部上半ナデ・下半ケズリ	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: 橙	
43	(34MG) 272	34MG T2	松尾頭4号墓 南側周溝	周溝埋土	甕	口縁部	△ 5.1 ※ 17.6 -	外面: 口縁部8条の平行沈線文 口縁部下~頸部ナデ 内面: 口縁部~頸部ナデ、頸部下半ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
44	(34MG) 259	34MG T2	松尾頭5号墓 北側周溝	周溝埋土	壺?	口縁部	△ 2.95 - -	外面: 口縁部に5条の擬凹線文 口縁部下~頸部ナデ 内面: 口縁部~頸部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 明褐	
45	(34MG) 274	34MG T2	松尾頭5号墓 北側周溝	周溝埋土	甕	口縁部	△ 2.6 ※ 17.0 -	外面: 口縁部3条の擬凹線文 内面: 口縁部~頸部ナデ	密	良好	外面: 灰黄褐 内面: 黒褐	
46	(34MG) 276, 277	34MG T2	松尾頭5号墓 北側周溝	⑧・⑨層	器台	口縁部~頸部	△ 4.7 ※ 21.8 -	外面: ナデ 内面: 口縁部上半ナデ 口縁部下半~頸部ミガキ	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: 橙	

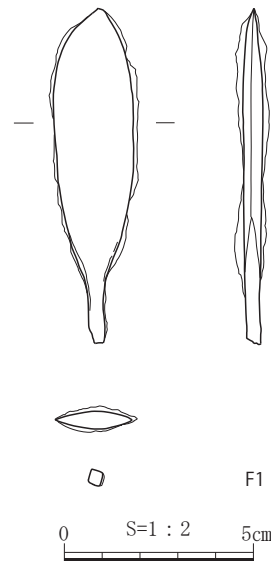
は弥生時代後期前葉、Po34・39は後期中葉、Po29・32・37は後期後葉にあたる。北側周溝から出土したPo39は3407遺構に伴う土器が二次的に混入したものである可能性が高い。

(4) 松尾頭4号墓出土遺物 (第49図)

4号墓出土遺物の点数は少なく、個体が認識できたのはPo42・43の2点である。Po42は墳丘直上で採取した鉢、Po43はサブトレンチの周溝内から出土した甕である。Po43は口縁部外面に擬凹線文を施す。弥生時代後期後葉の甕だが、1片しか出土せず、周溝内にも他に土器が散乱する様子が見られなかったため、4号墓に伴うものではないと判断した。

(5) 松尾頭5号墓出土遺物 (第49図)

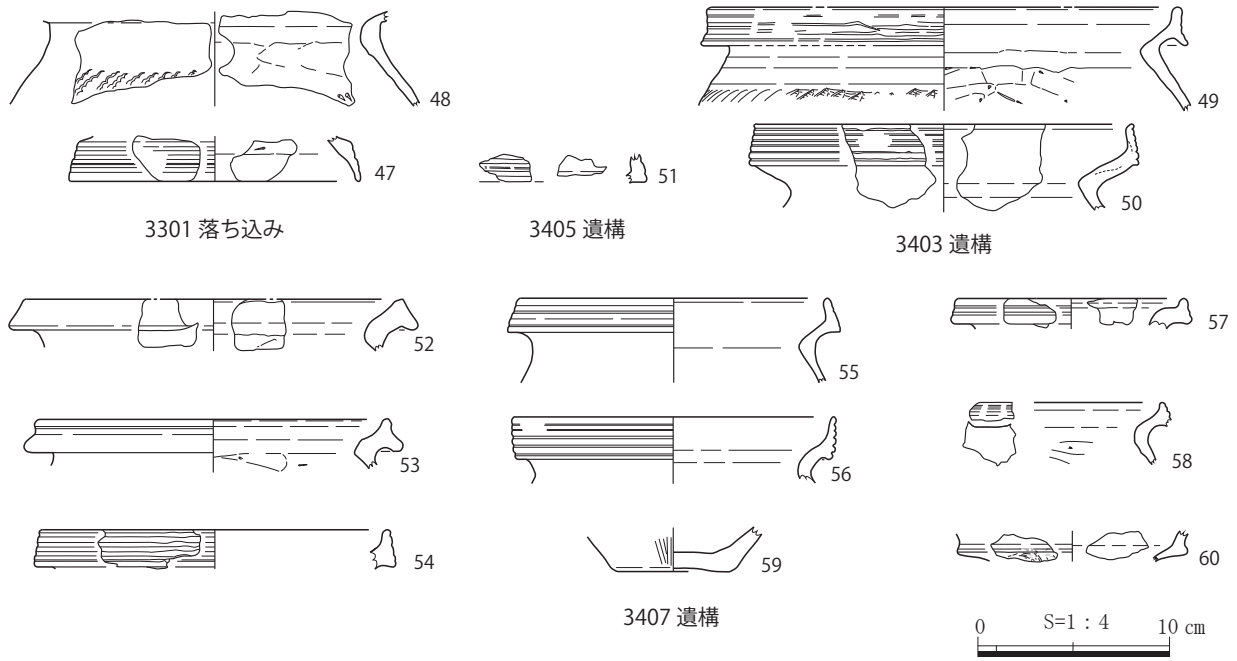
5号墓出土遺物の点数は少なく、個体認識できたものは3点である。いずれも周溝内から出土しているが、Po44・45は弥生時代後期中葉頃の土器とみられ、5号墓に伴わない遺物である。Po46は北側周溝に設定したサブトレンチから出土した器台である。外器面はナデ調整、内器面はミガキを施す。破片3点が近接して出土しており、受部の概ね1/2が残存していた。遺物の時期は、弥生時代終末期前半にあたり、遺物の出土状況から祭祀に用いられた器台が周溝内に転落したと考えられ、5号墓に伴う遺物と判断した。



遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	法量 (cm, ※:復元, △:残存)			重量 (g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
F1	(33MG) 42	10区 北東部	3号墓 東側周溝	埋土② 下面	鉄鏃	9	2	0	15	有茎柳葉式、酸化土砂含む

第50図 3号墓出土鉄器



第51図 3301 落ち込み・3403 土坑・3405 溝・3407 遺構出土遺物

遺物観察表

No.	取上番号	調査区	遺構	層位	器種	部位	法量 (cm. ※: 復元、△: 残存)			調整・施文	胎土	焼成	色調	備考
							器高	口径	底径					
47	(33MG) 14	松尾頭 3号墓 南側 Tr.	3301 落ち込み	埋土	器台	脚部	△ 2.4	※ 15.0	-	外面: 平行沈線文 内面: 端部ナデ、上部ケズリ	密	良好	外面: 浅黄橙 内面: にぶい黄橙	外面赤彩
48	(33MG) 16、 19	松尾頭 3号墓 南側 Tr.	3301 落ち込み	埋土	甕	頸部～ 肩部	△ 4.9	-	-	外面: 頸部にナデ 肩部に貝殻による連続刺突文 内面: 頸部ナデか?、頸部下ケズリ	やや粗	良好	外面: 明黄褐 内面: にぶい黄橙	口縁部欠損、 頸部外面に スス附着
49	(34MG) 325	10区 北東部	3403 土坑	3層	甕	口縁部～ 肩部	△ 5.4	※ 24.6	-	外面: 口縁部4条の凹線文 頸部ナデ、烈点文 内面: 口縁部ナデ、頸部ヘラケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 明黄褐～灰黄褐	頸部外面に スス附着
50	(34MG) 240	10区 北東部	3403 土坑	7層	甕	口縁部～ 頸部	△ 4.5	※ 19.6	-	外面: 口縁部6条の沈線文、頸部ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
51	(34MG) 295	10区 北東部	3405 溝	埋土	甕	口縁部	△ 1.5	-	-	外面: 口縁部3条の凹線文 内面: 風化、ナデ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
52	(33MG) 120	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 2.7	※ 19.7	-	外面: ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下風化	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
53	(33MG) 126	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 2.8	※ 18.0	-	外面: 口縁部凹線文、ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: にぶい黄橙	
54	(33MG) 105	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 2.1	※ 18.0	-	外面: 口縁部4条の平行沈線文、ナデ 内面: ナデ	密	硬質	外面: 黄橙～橙～ 褐灰～灰黄褐 内面: 橙～褐灰～灰黄褐	
55	(33MG) 129	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部～ 胴部	△ 4.4	※ 16.0	-	外面: 口縁部凹線文 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ヘラケズリ	密	良好	外面: 橙 内面: 橙	
56	(34MG) 322	10区 北東部	3407 遺構	③層	甕	口縁部	△ 3.5	※ 16.8	-	外面: 口縁部5条の平行沈線文 頸部ナデ 内面: ナデ、指押さえ	密	良好	外面: 褐灰 内面: 橙	
57	(33MG) 108	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部	△ 1.6	※ 11.7	-	外面: 口縁部2条の凹線文、ナデ 内面: ナデ	密	良好	外面: にぶい黄橙～橙 内面: 橙	
58	(33MG) 109	10区 北東部	3407 遺構	埋土	甕	口縁部～ 頸部	△ 3.3	-	-	外面: 口縁部3条の沈線文 頸部以下ナデ 内面: 口縁部ナデ、頸部以下ケズリ	密	良好	外面: にぶい黄橙 内面: 明黄褐～ にぶい黄橙	口縁部外面 にスス附着
59	(33MG) 106	10区北 東部	3407 遺構	埋土	壺?	底部	△ 2.8	-	※ 6.4	外面: ハケメ 内面: ナデか?	密	良好	外面: 褐灰 内面: 褐灰	
60	(34MG) 318	10区北 東部	3407 遺構	④層	高坏?	坏部	△ 1.6	-	-	外面: ナデ、頸部ハケメ 内面: ナデ	密	良好	外面: 橙 内面: にぶい黄橙	外面ベンガ ラ塗布